

THE COMPLETE FIRST SEASON

THE Peke FILES

Little Mustapha

LMB Entertainment

"the Peke Files "

the Complete 1st Season

Book #1

Little Mustapha

主な登場人物

オックス・モオルダア・ムスタファ

F.B.I. (エフビーエル) 特別捜査官。自称優秀な捜査官。天才的推理と「少女的第六感」で数々の難事件を解決……するの？

苦手なものとはたくさんあり過ぎてここには書ききれない。

始め彼の名前は「オックス・モルダア・ムスタファ」ですが、諸事情により、#005 「殺人豆」から名前が変わりました。詳しくは本編を参照。

ダナア・スケアリー・ザ・プリンセス

モルダアのパートナー。死体を切り刻むのが大好きな検死官（無免許）でもある。

自分はセクシーでゴージャスであると言い張っている恐怖の女。

アンタモ・スキヤナー

F.B.I. 副長官。モルダアたちから指示を出す人。モオルダアをおどかすことに情熱を燃やしている。

チョコレートと塩辛いものが大好き？

毛が薄いので髪は短くしている。ハゲを隠さないといういさぎよい一面もあるということ、なの？

怒百目鬼 鐵円（ドドメキ テツマル）

謎の人物。時々登場する予定。

始めは警部の肩書きで登場する予定だったが、それだと話がややこしくなるので取りやめに。今のところ全てが謎に包まれている。

ウイスキー・ドリンキングマン

常にウイスキーをラップ飲み。闇の組織の一員。裏で糸を引く男。色々たくらむ男。

その他

エピソード毎に紹介。

#001 「ムッシュューとマドモアゼル」

1

電話が鳴っている。この電話の音がそれまで何も動かなかった薄暗い部屋に多少の変化をもたらすかと思われ、この部屋にある全てが動こうとしない。ゴミ箱からあふれだしたゴミも、その近くに山積みになっていくビールの空き缶も、部屋の至る所に散乱している書類や本の全て。どれも電話の音には反応しない。それに、この部屋には人間だっているのである。毛布にくるまつて横になっている男である。この男ははたして生きているのであるか。もし生きていないのであれば、この部屋の電話機は全く無駄な働きをしていることになる。しかし、そんな心配はいらない。電話が鳴るまで、この何もおこらない部屋には男の寝息と、心臓が動くかすかな鼓動が静かにこだましていたのである。

一分ほどたつて電話の音は鳴りやんだ。すると、今になってようやく電話の音に反応するものがあつた。部屋の片隅でガチャツという音がした。どうやら、ビールの空き缶の山が崩れたようだ。不安定に積み上げられたものというのは、電話の音のようなちよつとした振動であつても、崩れてしまうことがある。電話の音には全く反応しなかつた男は、缶が崩れる音には驚いたのか、目を半分だけ開けて音のした方を見たが、それが缶の音だと解るとまた目を閉じて眠ろうとした。

いったいこの男はいつまで寝ようというのだろうか。昨晚、この男が眠りについてからもうすぐ二十時間が経とうとしている。もう今日の陽は沈もうとしている。この男は太陽の光を浴びることなど全く興味がないらしい。男が一瞬の覚醒から再び眠りに落ちようとした時、二度目の電話が鳴つた。先ほどの電話が鳴りやんでからさほど時間が経っていない。電話をかけているのは多分さつきと同じ人物であろう。男は観念したという感じで、のそのそと起き上がると、電話のありかを探した。

男は脱ぎ捨てられたTシャツの下に電話機を見つけた。

「もしもし」

「おい、モルダア。何やってるんだ！」

いきなり何やってるんだ、といわれても返す言葉がない。実際には何もしていなかったのだし。それにしても、電話の向こうにいるのは誰なのか。どうして男の名前を知っているのか。眠り過ぎたモルダアにはそんなことはどうでも良かった。ただ、電話に出たことをすこし後悔しているような感じがした。寝ぼけていても彼の「少女のような勘」だけ

は働くようだ。

「おい、きみ。寝てたのか？ 今何時だと思ってるんだ？」

「いや、寝てませんよ。起きてましたよ。本当に。大丈夫ですから」

何が大丈夫なのかは解らないが、その声で嘘をついていることは電話の相手も十分に気付いているはずである。

「モルダア。いい加減に出勤したらどうなんだ。キミを雇ってからもう一年以上は経ってるんだぞ。いったい今まで何をやっていったんだ？」

モルダアはやつと電話の相手が誰なのかが解った。彼が「F.B.I.」の面接を受けた時の面接官だ。名前も顔も覚えていないが、こいつはきつと極端に甘いものと極端に辛いものが好きな男だ。モルダアの、「少女的第六勘」は彼にこう伝えた。

「ボク採用だったんですか？ なんだ、呼んでくれたら、いつでも行つたんですけどねえ。なにせ呼ばれなかったもんだから。でも心配はいりませんよ。これまでずっと遊んで暮らしてきたわけじゃないですから。ちゃんと色々やってましたよ」

「私はキミのことを呼ばれなくても来る人間だと思っていたが、どうやら誤解だったらしいなあ。本当だったら、とっくの昔にクビなんだが、キミのお兄さんの件もあるしなあ。明日の朝必ず来るように。初出勤だけど、歓迎会はナシだぞ」

はたしてこの二人の会話は会話になっているのだろうか。まあ、それを気にしてもしょうがない。この先ずっとこんな感じなのだから。それにしても、モルダアが色々やっていたというのはどういふことなのであろうか。彼の兄、モルダア・ムスタファは「花の精リトル・ムスタファ」の調査中に失踪した。モルダアが「FBI」のペケ・ファイルを担当しようとしたのも兄の意志を継ぐためであったのだが、彼がこれまでしてきた色々なこと、とはリトル・ムスタファの調査に関することなのだろうか。

受話器を置いたモルダアは床に目をやると一面に散乱している書類をかき集めた。彼がしてきた色々なことの成果がその書類なのかもしれない。書類の一番はじめにはこう書いてある。「骨盤矯正で腰痛を治そう」

「結局、役に立たなかったなあ」そうつぶやくとモルダアは書類をゴミ箱に投げ入れた。もちろんあふれるほどゴミの入っているゴミ箱にその書類が入るわけもなく、それらは再び床に散乱することになった。そしてモルダアは、明日に備えて寝ることにした。

翌朝、モルダアはいつもなら熟睡している時間に無理矢理起きた。目覚めてから起き上がって顔を洗い、身支度を調べてドアの外に出るまでほとんど夢遊病者のようだった彼は、これからどこに行くのかさえ解っていないような状態だった。ところが彼が電車の窓から外を眺めている時だった。突然ある疑問が彼の頭の中を支配しはじめた。

「少女的第六感」が働いたのであろうか。「F.B.I.」とはいったいどのようなものなんだ？ どうして一年以上無断欠勤していたボクに今頃になって電話をしてきたんだ？ ボクは今まで「F.B.I.」を警察のような特別な団体、いわゆる国家権力だ、と言い張って銃を乱射しているようなかっこいいものだと思っていたが、そういうボクの想像はたして合っているのだろうか？ それに、ボクの兄貴はどうして Little Mustapha の捜査なんかしていたんだ？ F.B.I.っていったい何をしているところなんだ？」

モルダア君、心配することはないよ。キミが「F.B.I.」のビルに一步足を踏み入れればそんなことはすぐに解ること。きつとキミの「少女的第六感」がきみに教えてくれるだろう。とは言ったもののどうしたらいいのでしょうか。「F.B.I.」にはどういう組織に属していて、どれだけの権限があつて、どんなことが出来るのか。そういったことを決めておかないと、話は先に進まなくなるか、あるいは全く意味不明なものになっていくでしょう。まあ、そんなことはどうでもいいや。リアリティーはあつてもなくても同じこと。結局はフィクションの中の出来事ですから。

3

都内某所。F.B.I.のビルディング。

これって舞台は日本なのかあ。まあ、日本語で書いてるわけだし、それに舞台を外国にしてしまうと色々解らないことだらけなのでしばらくは日本にしましょう。そのうち「F.B.I.」海外進出もあるでしょう。

モルダアは汗だくになって3階のオフィスへたどり着いた。なぜかこのビルにはエレベーターがないのだ。モルダアが「F.B.I.」のオフィスへ足を踏み入れると広いフロアには誰の姿もないように思われた。今日は休日？ モルダアがオフィスの入り口でぼーっとしていると、奥の方から声が聞こえた。

「おい、モルダア、何やってるんだ！」

声のする方を見ると、あの男が座っている。昨日モルダアの家に電話をかけてきた男。以前よりも多少白髪が増えたようだが、彼を面接した男に違いない。よかつた、今日は休日じゃなさそうだ。それにしてもこの男の名前がまだ思い出せない。このまま名前も解らずにいるのはさすがに失礼な感じがする。どうしたものか？

「いやー、すいません。少し遅刻しちゃいました」

そういいながら、モルダアはその男が座っている机に向かって歩き出した。机に近付くと、やつぱりあつた。男の机には名前の書かれたプレートがついていた。――副長官スキヤナー。かなり偉い人――そうだったのか。この人は副長官だったんだ。

「今何時だか知ってるか？ モルダア。午後の一時だぞ」

「ええ、知ってますよ」

「私は今日の朝こい、と言ったはずだ」

「ボクにとつて一時は朝ですよ。一時の一時は朝一番の一ですからね」
全く意味の解らない言い訳である。スキヤナーもこの発言には返す言葉が見つからないようだ。

「それにしても、あれですねえ。みんなはどこへ行ったんですか？」

スキヤナーは眉毛を上げ、口を半分開けて「はっ？」という表情をした。相手の言っていることが理解できない時のこういう顔は、どうにも面白い。スキヤナーは今何かを考えようとしているけど何を考えていいのかすら解らなくて、頭の中が一瞬真っ白になっているはずである。

「この人たちですよ。ボクはここにスーツを着た捜査官たちがたくさんいてざわざわしてると思ってたんですけど」
「なんだ、そういうことか。そんな人たちはここにはいないよ。捜査官が何人もいたら面倒だろ。まあ話の展開によっては何人か別の捜査官が登場するかもしれないけどな」
今度はモルダアの頭の中が真っ白だ。

「そうだ、モルダア。スケアラーにはもうあつたのか？」

「何アラー？ 誰それ？」

「キミのパートナーだよ。後でキミの部屋に行くように言っている。しばらく待っていればやってくるだろう」
「ボクの部屋ってどこですか。このフロアにはこんなにスペースがあるのに、部屋が別にあるの？ 捜査官が誰もいな

いのに、いったいこの広いフロアは何のためにあるんですか？」

「ここは私の部屋だ。ちよつと広すぎるけどな。キミの部屋は地下にある。お兄さんの使っていた部屋だよ。太陽嫌いのキミに地下室はもってこいだろ？」

「ゲツ、地下ですか。面倒だなあ。それじゃあ、何か用事がある時は地下からこの13階まで上がって来なくちゃいけないですよ。それにどうしてこのビルにはエレベーターがないんですか？ ボクはここまでくるのに三回も休憩しなきゃいけませんよ」

「それはまあいいじゃないか。どんな建築家もうっかりミスをすることもあるんだよ」

全然良くない。それはどう考えても許されないミスである。モルダアはそのうっかりミスのうちかなり建築家を取っ捕まえて八つ裂きに、いや火あぶりに、いやいやもつとモノスゴイことをしてやりたい気分になったのだが、それはどうにもならないこと。こういう時には笑うしかない。モルダアは「へへっ」と笑ってみせた。スキヤナーはそれを見てちよつと気味が悪い感じがしたが、そういうモルダアの態度は兄とそっくりであることに気付いた。まったく遺伝とは奇妙なものである。

「それじゃあ、ボクは部屋にいればいいんですね？」

「そうしてくれたまえ。部屋にいればそのうち事件も起きるだろう」

そのうちって、どういうこと？ ここはそんなに暇なところなの？ モルダアはいいしれぬ不安を感じはじめていた。「少女的第六感」がモルダアに何かを伝えようとしているのであろうか。

モルダアはスキヤナーのデスクに背を向け13階から地下室までの長い道のりを歩み始めた。広いフロアにモルダアの足音だけが響き渡っていた。ペタッ、ペタッ、ペタッ、ペタッ……。

4

モルダアが地下の自分の部屋へ入ると、そこはひどい有り様だった。どうやらこの部屋は兄モルダアが失踪する前のそのままの状態で放置されていたようだ。花の精リトル・ムスタファに関する書類、新聞の切り抜き、たばこの吸い殻。それからまだある。一度解けてドロドロになつてからまた固まった食べかけのチョコレート。一見、悪臭を放ちそうだが、それらはあまりに長い間放置されていたせいか、臭いを出し切ってしまった感じである。モルダアはそれらを

見ても少しも驚く様子はなかった。こんな光景は毎日彼の部屋で見ているのだから。モルダアは椅子に腰掛けると両手を首の後ろに持つていき、のけぞつてみた。

ちよつどその時、ドアをノックする音が聞こえた。モルダアはのけぞらした上半身をさらにのけぞらしてドアの方に目をやった。モルダアは危うくひっくり返りそうになった。ドアのところに立っていたのは、モルダアがこれまで見たことのないような、美女！

こんな時こそ冷静にならなければいけない。こういう美女の前で不自然な行動をしたらすぐに嫌われるんだ。何気なく、ごく自然に振舞つて相手の警戒心を解く。それが一流のやり方。優秀な捜査官は一目惚れなどしないものさ。でも、最後にはキミのハートをいただきます。

そんなことを考えているモルダアは自分の振る舞いがどう見ても怪しくなっていくことに気付いていない。モルダアはこの美女を迎え入れるのに、立ち上がるべきか座っているべきか決めかねて、椅子から尻を半分だけ浮かせて、中腰の状態になつていた。

不思議そうな顔をしていた美女が口を開く

「あのう……」

「まあ入りたまえ。キミが来ることは解つていたんだ」

モルダアが遮つた。多少落ち着きを取り戻したのか、今はちゃんと椅子に座っている。ただいつまでもつのが問題である。モルダアは部屋に入つてきた美女を目で追つた。後から香水の甘い香りが続いた。普通のスーツを着ているにもかかわらず、妙に艶かしい感じがする。それが美女の美女たるゆえんなのかなあ。そんなことを思いながらモルダアは視線を美女のつま先から徐々に上げていく。モルダアの頭の中は今や蝶々の舞う花畑。何がなんだか解らない状態になつてきていた。しかし、次の瞬間モルダアと美女の目と目が合う。「しまった！」モルダアは自分の緩みきつた表情をとつさに引き締めた。しかし相手はこんなふうにはなれないことにはなれているのか、少しも気にしていないようだった。さすがは美女である。

「まあ掛けたまえ」

モルダアが椅子を指差すと、美女は微笑んでから椅子に腰掛けた。「ちよつと、今の見た？ 微笑んだよ。営業用のニコニコじゃなくて、多少の色気を含んだ微笑みだよ」モルダアは勝手に盛り上がっている。美女はバッグの中から書類を何枚か取り出した。取り出す間に、美女は二度も足を組み替えた。太股。ふともも。フトモモ！モルダアは視界の

下の方で、その光景をしつかりと脳裏に焼きつけた。

「わたしが今日来たのは、あなたに新しい……」

「いや、説明はいいよ。その書類にサインすればいいんだろ。ダーリン……いや、パートナー」

モルダアは美女の取り出した書類が、「ロビン」の正式な捜査官になるために必要な契約書か何かには違いないと決めつけていた。それに、書類というものは大抵サインをするものと決まっている。頭の切れる男はそんなことは当たり前のように知っているものさ。

「あら、さすがは優秀な捜査官ですね。わたしが説明する前に全部理解してしまったのね」

美女の目が輝いている。ああ、よかった。「ロビン」に入って本当によかったよ。こんな美女がパートナーで、さらにかなしの確率でこの美女はこの優秀な捜査官に惹かれている。モルダアはまた顔中の筋肉が緩みそうになるのを必死にこらえた。

「捜査官ならこんなことは朝飯前さ。じゃあ書類をこちらに」

美女はモルダアの横まで近付いてきてから、机の上に書類を広げた。座っているモルダアの肩に美女の腰がほとんどくっつきそうなくらいに近づいている。それから腰をかがめてモルダアの耳元に口を近付けた。

「このこと、ここにサインをするのよ」

美女のささやくまに、モルダアはサインをした。書類に何が書かれているのかなど少しも確かめることはしなかった。モルダアの頭の中は、この美女とこれから繰り広げられるロマンスのことで一杯になっている。

「ねえダーリ……じゃなくてパートナー。今夜は少しタフな捜査をキミと一緒にすることに……」

モルダアが言い終わる前に美女は、さつと書類を片付けて部屋から出ていってしまった。

「ねえ、ちよつと！ どこ行くの？」

5

モルダアの部屋からでていく美女はドアのところでもう一人の女とすれ違った。この女、不細工というほどではないが、さつきの美女と比べたらかなりくたびれた感じがする。女はしばらく、小走りで遠ざかっていく美女の方を眺めて

いたが、美女が非常階段の扉の向こうに見えなくなると、部屋の中であっけにとられているモルダアのほうを見た。「あのかた、どなたですか？」

全く変なタイムリングで夢からたたき起こされた感じのモルダアは質問にまともに答えられるはずがない。

「美女のフトモモ・・・」

女は眉間にしわを寄せて明らかに嫌悪の表情をしめした。これでモルダアもやっと我に返った。それにしても驚くほど恐ろしい表情をする女である。

「あつ、失礼。ところでキミは？」

「あらいやだ。聞いていませんでしたの？ あたくし、あなたのパートナーのスケアリーですよ」

「えつ、キミが？ じゃあさっきの女はだれなんだ？」

「だからあたくしも聞いたんじゃないやしませんか」

そいつは困ったことになった。いったい何の書類にサインなんかしたのだろうか。なんだかいやな予感がする。例の「少女的第六感」である。いや、待てよ。書類にサインをもらいにくるのはパートナーでなくてもいいはず。あれきつと事務の女の子かなんかに違いない。もしかするとあのスキヤナーの美人秘書かも知れない。なかなかやるな、あのおっさん。

「スケアリー、ここには事務の人とか秘書とかいるんだろ？」

「いるわけありませんわよ。ここにるのはあたくしと副長官とあなただけですのよ」

モルダアの「少女的第六感」はますます活発に働き始めていた。

6

「おい、またあの女来てなかったか？」

モルダアの部屋に入ってきたのはスキヤナーだった。妙に涼しい表情だ。13階から階段で下りてきたにしては汗一つかいていない。

「副長官、今降りてきたんですか？」

スキヤナーの表情に違和感を感じたモルダアが聞いた。

「そうだが、それがどうした？」

「13階から階段で下りてきたなら、もつと息を切らしててもいいと思って」

「階段なんかでくるもんか。私は窓拭き用のゴンドラを使ってるんだ。キミも早く操作を覚えた方がいいぞ」

なんてことだ。つまりスーツ姿の人間が窓から出入りをしているということなのか。想像してみると何とも気の滅入る光景である。

「そうだ、キミにこの書類にサインしてもらわなくちゃいけないんだ。これでキミも正式にFBIの捜査官として認められることになるぞ」

スキヤナーは持っていた書類をモルダアに手渡した。

「ところで、あの女って何のことですか？」

二人のやりとりを見ていたスケアリーがしびれを切らして割って入った。話が途中で終わってしまうことが許せない性格らしい。

「ああ、そうだったな。あれはひどい女だよ。保険会社から来たとかいってこのビルに入り込むんだがねえ、あれは詐欺師だぞ」

モルダアは今日二度目のサインをしながら、しっかりとこの話に耳を傾けていた。

「新しい捜査官が入ると必ずやってきてな、色仕掛けで生命保険に入るように勧めるんだ。まあ、ふつうはそんなことに引つかかるようなことはないんだが、一度断つても何度もくるらしいんだ。それだけならまだいいんだが、くるたびにむこうの行動が過激になっていくらしい。私が聞いた話じゃ……うへへっ。私が聞いた話だとその女が四回目にやってきたときにな……うへへっ」

完全なスケベオヤジになったスキヤナーをスケアリーがもの凄い形相で睨みつけている。

「おっと、失礼。レディーの前でする話ではなかったな。まあくるたびにスカートの丈が短くなった、としておこう」
「なんだ、どうせだまされるんだつらもつと粘ればよかった。それにしても四回目には何が起きるんだ？ 気になって仕方がない。」

「そこまでして、生命保険を勧めてどうしようっていうんですの？」

「それが、ただの生命保険じゃないんだな。ある時、契約してしまったやつがいてな。確か、五回目にその女が来たときだったかな」

五回目には何が起きるんだ？ 四回目よりももっとすごいのか？ しかし、もうすでにだまされてしまったモルダアには知るよしもない。

「そのかた、どうなっちゃったの？」

「契約した次の日にトレーラーにひかれて死んじゃったんだ」

「まあひどい」

「ひどいのはそれだけじゃないんだ。その保険金の受取人は誰だったと思う？」

「ご家族のかたかしら？」

「なんと、事故の前日に入籍していた謎の女だったんだ。つまりその女がここにやってきていた女ということだな。保険のサインと一緒に婚姻届にもサインをさせていたらしいんだ」

「そういえばさつきこの部屋から女のかたが出ていくのを見ましたわよ、あたくし」

「本当か？ モルダア。まさか騙されなかつただろうね」

下を向いたまま話を聞いていたモルダアの顔は真っ赤になっていた。

「まさか。ボクがそんな手に引つかかる訳ないじゃないですか」

「声が震えていますわよ。モルダア」

モルダアはそれには何も答えずにすつと立ち上がった。

「それじゃあ、ムツシューにマドモアゼル。ボクはそろそろ帰宅することにするよ」

「なんだ、もう帰るのか？ それにムツシューってなんだ？」

「知りませんか？ ジェームス・ボンド。優秀なエージェントっていうのはフランス人なんですよ」

「何言ってるんだ。ジェームスボンドはイ・・・まあいいか」

モルダアはすでに部屋を飛び出していった。

「どうしたんだ？ 変なやつだなあ。ところでスケアリー、今日は焼き肉でも食べにいかないか？ 息子がバイトしている店に行けば安く食べられるぞ」

「まあ、ステキ！」

モルダアは大急ぎで帰宅した。優秀な捜査官としてやるべきことはただ一つ。何とかして明日までに契約を解消しないといけない。もしできなかった場合、モルダアはどんな方法で殺害されるのだろうか。以前の被害者のように事故を装って殺されるのだろうか。それとも殺し屋がやってくるのだろうか。あるいは朝飲むコーヒーに毒が入っているのか。モルダアの「少女的第六感」は彼に余計なことばかりを考えさせた。モルダアは電話帳を調べて、消費者相談センターに電話をかけてみた。

「もしもし、保険の契約を解消したいんです。それって同僚や上司にばれないようにできるんですかねえ？　ボクは優秀な捜査官だから秘密厳守でお願いしますよ」
はたしてモルダアは助かるのだろうか。

#002 「猿軍団」

1

とある高原の小さな牧場

介蔵じいさんは牧場で一日の仕事を終え、今はほろ酔い気分で裏庭においたベンチに座っている。さつきまで隣に座っていた梅子ばあさんは、牛の様子を見に牛舎へ行つた。陽はもうすでに落ちてしまったがそれほど冷え込むこともなかった。介蔵じいさんは一日の中でこの時間が何よりも好きなのである。こうしてここに座っていると介蔵じいさんは生活の中で唯一の安らぎを得られるのである。ここにいるときは何もしない。近くの森を眺めたり、月が出ていれば月を眺めたり。ただそれだけである。そうしてしばらくしたら、寝室に行つて眠る。こうしたことを介蔵じいさんは何十年と続けてきた。そして今夜もそうなるはずだった。

介蔵じいさんが二本目のビールに手を伸ばした時だった。牛たちが異常な様子で騒ぎ出した。牛舎から梅子ばあさんが飛び出してきた。

「じいさん、大変じゃ！ じいさんや！ ヤツらがきたんじゃ！ じいさんやあ！」

介蔵じいさんの顔は真っ青になっていた。じいさんには「ヤツら」が誰なのかははっきり解らなかったが、牛たちに何が起こっているのかははっきり解っていた。ヤツらがやってきたのだ。「ばあさんやあ！」介蔵じいさんが家の中へかけていった。

暗い牛舎の中では梅子ばあさんが必死になつて牛たちに襲いかかっている。「ヤツら」を追い払おうとしている。牛たちに襲いかかっているのはニホンザルの群であった。どうしてニホンザルが牛を襲っているのだろうか？ 餌にするわけではあるまい。とにかくサルたちは牛に襲いかかっている。梅子ばあさんは何とか牛たちを助けようと近くに落ちていた棒きれを拾つてそれを振り回していたが、相手の数が多すぎる。サルたちは梅子ばあさんの振り回す棒を巧みにかわしてまた牛の背中に飛びつく。棒が空を切る音だけが虚しく響いていた。

「やめねえか！ 悪魔の使いめ！」介蔵じいさんが猟銃を手にもって来た。サルたちは介蔵じいさんの声に全く反応しなかった。介蔵じいさんは空へ向かつて猟銃を撃った。一瞬、サルたちは動きを止め、介蔵じいさんの方をみた。梅子ばあさんもサルたちと同じように介蔵じいさんの方を見た。そして、じいさんに近づく影に気付いた。

「じいさん、後ろ！」

梅子ばあさんが言い終わる前に、影は介蔵じいさんに襲いかかった。それはじいさんよりも背の高い巨大なサルだった。不意に襲われた介蔵じいさんはよろめいた拍子に銃の引き金を引いてしまった。銃口は梅子ばあさんの方を向いていた。そして放たれた散弾は梅子ばあさんの顔半分を牛舎の壁まで吹き飛ばした。

「ああ、なんてことを……」

介蔵じいさんは呆然として銃を床に落とした。その瞬間、銃声に驚いて固まっていたサルたちが一斉に介蔵じいさんに襲いかかった。サルたちに囲まれた介蔵じいさんはしばらく素手で応戦していたが、最後に巨大なサルが牧草用のフォークでとどめを刺した。

牛舎の中に一瞬の静寂が訪れた。その直後、牛舎の外がぱつと昼間のような明るさになった。その強烈な光は瞬く間に牛舎の中まで入り込んできた。目がくらんで何も見えない。やがて光は何かの吸い込まれるようにして消えていった。消えたのは光だけではない。そこにいた牛たちがすべていなくなっていた。その光景を見届けたサルたちはしばらくじっとしていたが、巨大なサルが、ほかのサルたちに向かって何か合図をすると、サルたちはみな森の中へ消えていった。

2

F.B.I.ビルディングの地下室

スケアリーが部屋へ入つてくると、モルダアがパソコンの前で固まっている。

「あら、珍しく朝から出勤ですの？」

モルダアは反応しない。どうやら、パソコンと一緒にフリーズしているらしい。スケアリーはモルダアには何も言わずにパソコンの操作して正常に動くようにした。こういう時には、人間よりも先にパソコンに適切な処置をすれば人間の方は勝手に動き出すのである。

「やあ、スケアリー」モルダアも正常に動きだした。

「何ですか？ 電話で言ってたおもしろい事件って」

「これだよ、高原牧場殺人事件」

モルダアはパソコンのモニターを指差したが、再起動したパソコンのモニターには何も表示されていない。

「それって、今日の新聞に載ってた殺人事件のこと？ それとペケファイルがどう関係してるというんですの？」

「老夫婦が殺されただけならただの殺人事件なんだが、それだけじゃないんだ。事件のあった高原では以前から、謎の光を目撃したという人が何人もいるんだ」

「あなた、もしかして犯人が「FO」に乗ってきた宇宙人だとも言うおつもりかしら」

「そうは言っていないよ。でも、事件のあった地域で今までにあつた犯罪と言えば信号無視くらいなんだぜ。そんな場所で殺人事件が起こるなんて、謎の光が関係している可能性は大いにあると思うんだけどなあ。まさにペケファイルじゃないか？」

「まあ、何でもいいですわ。あなたがそう思うのならあたくしも暇つぶし・・・」

突然、部屋の扉が開いてスキヤナーが入ってきた。

「おい、モルダア！ 何やってるんだ」

「何、つて。ちゃんと仕事してますよ」

「えへへ、知ってるよ。ちよつと驚かしてみようかと思つてな」

「あんまり驚きませんでしたわ」

スケアリーは驚かなかつたが、モルダアはちよつと驚いた。まあそんなことはどうでもいい。

「それより、モルダア。おもしろいこと聞いちゃつたぞ」

「なんだかスキヤナーは嬉しそうにニヤニヤしている。」

「さつき保険会社から電話がかかってきたんだけどなあ、キミ生命保険を解約したそうじゃないか？」

「何のことだか解りませんよ」

モルダアの顔が真っ赤である。これを見てスキヤナーはさらに嬉しそう。

「キミ、何されたんだ？ あの女に」

「あらいやだ、モルダア。あなたお色気保険金詐欺に引つかかってしまったの？」

「ホントに何のことだか解りませんよ」

モルダアはほとんど泣きそうである。あれほど秘密にしてくれと頼んだのに、あの弁護士はきつと会う人みんなに言いふらしているに違いない。今度あつたら承知しないぞ！ モルダアは心の中で叫んでみた。

「それよりも副長官、何しにきたんですか？ 仕事のじゃまですよ！」

「いや、ただキミをからかいに來ただけだ。13階は眺めはいいんだが、どうにも寂しくてな。まあ、この辺で失礼するよ」スキヤナーはまだ嬉しそうにしながら扉の方に歩いていったが、扉のところでふと立ち止まった。

「そうそう、キミたち高原牧場に行くなら旅費は自分たちで出してくれよ。最近財政難で困ってるもんでな。それから、美女にはくれぐれも気をつけるんだぞ。ウヘヘヘヘッ」

スキヤナーが出ていった後も廊下から彼の笑い声がしばらく聞こえていた。

「ウフフツ、ウヘヘッ、アハハハッ……」

3

高原牧場、事件現場

地元の警察はみなくらい顔をして現場検証をしていた。こののどかな田舎で起きた事件にしては少し残酷すぎる事件であった。周辺には何人かの報道関係者がいて、何かおもしろいネタを見つけようとしていたが、あまりやる気はなさそうである。もうすでに警察の発表は終わり、犯人の情報が得られるまで特に報道すべきネタは期待できなかったのである。あと彼らがやるべきことは、大げさな手法で事件を報道し大衆の興味を引くことである。

モルダアとスケアリーが高原牧場に到着した。モルダアは車から降りると内ポケットから手帳を取り出し近くにいた男に見せた。

「F.B.I.のモルダア捜査官だ！」

よし、きまつたぞ！ 前から一度やってみたかったんだよなあ。この男はきつと「お待ちしてました、来てくださって助かりますよ」とか言うに違いない。なんと言ってもボクは優秀な捜査官だから。しかし、モルダアの期待に反して、男はぼかんと口を開けている。

「モルダア、そのかたはテレビ局のかたですよ」

モルダアは聞こえないふりをしてそのまま犯行現場へと歩いていった。

遺体はすでに牛舎から移動されていたが、さっきまで遺体に群がっていたと思われるハエがあたりを飛び回っていた。モルダアは牛舎の入り口からそつと中をのぞいてみた。中の様子がよくわからない。

「死体はまだあるのかな？」

モルダアは入り口で番をしている警察官に聞いてみた。その警察官にもう遺体がないということを知るとモルダアはホッとした表情をした。死体を見るのが怖かったのか？

「それより、あなたは誰ですか？」

警察官にきつい口調で聞かれた。モルダアはむつととしてポケットから手帳を出した。

「F.B.I.」のモルダア捜査官だ！ キミは我々が来ることを知らされてないのかね」

「知りませんよ。それにF.B.I.って何ですか？」

モルダアの「少女的第六感」はこの質問に含まれた重大な問題をモルダアに伝えた。「F.B.I.って何？」これはモルダア自身が一番気にかけていた疑問である。やっぱりF.B.I.っていうのはインチキ団体だったのか？

「あたくしはF.B.I.」のスケアリー捜査官ですよ。ニコラスという刑事様はここにおいでじゃないかしら？ その方に聞いていただければ、おわかりになるはずですよ」

警察官はスケアリーにそういわれて、渋々牛舎の中にいるニコラスという刑事のところへ行つた。しばらくしてその警察官が戻ってきて、モルダアとスケアリーを中に入れてくれた。ニコラスという刑事はちゃんと解つていたらしい。

F.B.I.」はそこそこ偉い団体らしい。・・・ニコラス刑事？

「あなた達はF.B.I.」のかたですね。来てくださって助かりますよ」

モルダアは予期していなかったところでこの台詞を聞いてちよつと嬉しかった。

「何しろこんな田舎じゃめつたに起こらない忌まわしい事件ですからねえ。警察官たちもこういう事件の捜査には不慣れでしてね。遺体を見て卒倒する警察官もいたくらいですよ。全くお恥ずかしい」

ニコラス刑事はこの田舎には似つかわしくない都会的な清潔感を漂わせている。それに二枚目だ。それにしてもなんだか、「コビー」はかなり偉い団体みたいだぞ。大丈夫か、モルダア？

「ニコラス刑事さん。我々に任せてください。ニコラス刑事さん。我々がどんな難事件でも解決してみますよ。ニコラス刑事さん」

「頼みます、モルダア捜査官。我々もできる限り協力します。それからボクのごことはニコラスと呼んでくださってかまいませんよ」

「いや、絶対にニコラス刑事さんと呼ばせていただきます。おもしろいから」

ニコラス刑事は何がおもしろいか解らなかつたが、取りあえず二人に事件の詳細を教えることにした。

「被害者はこの牧場の持ち主で牛屁端介蔵（ウシヘバタスケゾウ）、六十九歳と牛屁端梅子（ウシヘバタウメコ）、六十五歳の夫婦。牛屁端梅子は散弾銃で頭部を撃たれて即死したようです。牛屁端介蔵の方は体中に傷を負っていますが、直接の死因はフォークで胸部を刺されたためのものであります」

「フォークって食べるときに使うやつですか？ ニコラス刑事さん」

モルダアは間違っていることを知っていたが、どうしても言いたかつたので聞いてみた。

「違いますよ、そこに落ちてるやつです」

ニコラス刑事はいやな顔ひとつせずにモルダアに言った。相当にいい人か、或いは相当に鈍い人なのかもしれない。ニコラス刑事が指差した先には食べるときに使うフォークの何百倍もある干し草用のフォークがおかれていた。先端には介蔵じいさんのものと思われる血がべつとりとついていた。モルダアが顔をしかめてフォークから少し後ずさった。どうやらモルダアは血とか死体とかが苦手なようだ。しかし、優秀な捜査官を自負するモルダアはがんばってフォークに近づいてみた。

「それにしても犯人はどうしてこんな方法で牛屁端夫妻を殺害なさったのかしら？ 二人とも散弾銃で殺害なさればいいのに、どうして介蔵様だけフォークで刺すなんて原始的なことをなさったのかしら？」

殺害なさるって、どう考えても変な言い回しであるが、スケアリーとはそんな人。気にすることはない。

「それが、おかしいんですよ」

ニコラス刑事が答えた。スケアリーの変な言葉遣いには気付かないふりをしている。或いは本当に気付いていないのか？ まあ、それはどうでもいい。

「そのフォークからは犯人のものと思われる指紋が検出されたんですが、散弾銃からは介蔵さんの指紋以外は出なかつたんですよ」

おかしい。確におかしいが「ロビー」のお二人さん、もう一つおかしいことがあるのに気付きませんか？ 実はニコラス刑事は二人がこのことを聞かないのをさつきから不思議に思っていたが、とうとうしびれを切らして自分から言うことにした。

「それから、もう一つ不可解なことがあるんですけどねえ……」

「ウシさんがいませんわ」

スケアリーは気付いていたらしい。さつきからずつとフォークを観察していたモルダアが顔を上げた。

「牛強盗だな、これは」

こう言うとモルダアは腰をあげフォークについた一本の毛を見つけてそれを慎重に手帳に挟んだ。モルダアはその場を離れて牛舎の隅の方へ向かった。何か面白いものを発見したらしい。

モルダアが見つけたのは搾乳機だった。これが事件と何の関係があるのか知らないが、モルダアはこういう機械を見るとどうしても触ってみたくなるらしい。スケアリーとニコラス刑事は牛の行方について意見を交わしているよだった。モルダアは搾乳機のホースの先についた吸引口を持ってスケアリー声をかけた。

「ねえ、これでキミの……」

「その機械に触るんじゃねえ」

突然、近くにいた警察官がモルダアを怒鳴りつけた。かなり歳をとった警官だ。

「その搾乳機は介蔵じいさんのお手製なんじゃ。そいつは介蔵じいさんの形見じゃ。用もないのに触ったりするんじゃねえ」

モルダアはかなりびくついてはいたが、この警察官が怒鳴ったおかげで、モルダアはスケアリーに平手打ちを喰らわずにすんだのである。モルダアがスケアリーに何を言おうとしたのか？ だいたい想像がつくでしょう。

モルダアはもうやる事がなくなってしまう困っていた。取りあえず、体を傾け壁に手をつけて事件現場を眺めることにしよう。モルダアはそれが難事件に直面して、いよいよ脳が活発に働き始めた時の優秀な捜査官のポーズと思っていた。モルダアが壁に手を当てると、なにかヌルヌルしたものが指に触った。モルダアの指先には赤錆色をしたウニの身のようなものがついている。モルダアの「少女的第六感」は彼に緊急事態を告げている。

「ねえ、これなんだろう？」

「ああ、それは触っちゃだめですよ。それは梅子夫人の脳みそです」

ニコラス刑事が言い終わる前に、モルダアは朝食が胃からこみ上げてくるのを感じた。しかし、優秀な捜査官は嘔吐などしない。幸い、よく泥酔するモルダアは、胃からこみ上げてくるものの扱いにはなれている。モルダアは息を止めて、牛舎の裏へと走っていった。

牛舎の裏のぬかるみにうずくまっていたモルダアは、自分の吐き出したもののそばに何かを発見した。モルダアは近くにいた警官を呼び寄せた。

「キミ、これは何だ？」

「これは豆腐にワカメですわねえ。こりゃあ、味噌汁だ！」

「そんなことは解ってるよ。自分で食べたものなんだから。そうじゃなくて、このぬかるみについた足跡のことだよ。何かの動物の足跡みたいだけど」

「ああ、こいつのことかあ。あんた、こんなもんわからんでどうする？ これはサルの足跡に決まってるさあ。この時期は餌が少なくて、よく山から降りてくるんだあ」

「そうか、サルかあ」

モルダアの「少女的第六感」は初めてまともなことに機能し始めた。足跡は森へと続いていた。

4

牛屁端邸

「ねえモルダア、あたくしはここに事件と関係のあるものがあるとは思えませんのよ」

「そんなことはないね。ここには、いや、この地域一帯には何かがあるんだ。ボクがさつき遊んでいた搾乳機だけどねえ、あれにはモーターもエンジンもついていなかったんだ。そんなもので牛の乳が吸い出せると思うかい？」

「壊れていたんじゃないやありません？ 動力源だけははずして修理に出したとか。それか、もしかすると手動なのかも知れませんか？」

「それなら手で乳搾りすればいいじゃないか。この事件とあの不思議な搾乳機は関係があるに違いないよ。あれはきつとDFOと同じ動力で動いているんだ。それはそうと、さっきの搾乳機でキミの……」

「モルダア、これを見て」

モルダアはまた九死に一生を得た。スケアリーが何かに気付いてモルダアの言葉を遮らなければ、モルダアはスケアリーからどんな仕打ちを受けていたか知れたものではない。で、スケアリーは何を見つけたのであろうか。

スケアリーは引き出しから写真を取り出しモルダアに手渡した。写真には若かりし頃の介蔵じいさんと何人かの友人らしき人物が写っている。隣には梅子夫人。まだこのときには牛尻端の妻ではなかったかも知れない。そして反対側の隣にはさつきモルダアを怒鳴りつけた警官が写っている。

「あの警官は介蔵さんの幼なじみだったのかあ。そこにあるファイルは何だろう？」

モルダアは写真と一緒に入っていたファイル調べてみた。中には新聞の切り抜きが納められている。

「面白いものを見つけたよ、スケアリー。やっぱり今回の事件は謎の光と関係しているのかも知れない」

新聞にはだいたいこんなことが書かれていた。「森へキャンプに出かけたまま消息を絶つていた五人組が一ヶ月後に発見された。五人の健康状態はきわめて良好であり、一ヶ月の間森をさまよっていたとは思えないほどであった。しかし、五人の記憶はきわめて曖昧であり彼らが一ヶ月の間どのように過ごしていたのかを調べるのは不可能であると思われる。五人の証言が一致しているのは、彼らが道に迷ったときに森の奥に光が見えて彼らがその方向へ向かったということだけである」ほかにもたくさん切り抜きがある。どれもこの地域で起こった失踪事件や、謎の発光物体目撃の記事ばかりである。どうやら、さっきの写真に写っていたのはこのときに失踪した五人のようだ。

モルダアは目を輝かして新聞を読み上げていたが、スケアリーは部屋の中を物色するのに忙しくて何も聞いていない。

「ねえ、モルダア。おかしくありませんこと？ この家にあるものは、どれもみんな高級品ばかりですわ。なんだかジェラシーですわ。牧場ってそんなに儲かるのかしら？」

「そうは思えないねえ。あの牛舎の大きさからいって、この牧場はかなり小さなものだよ。これだけのものを買いそろえるにはもつと大規模にやらないと無理だね」

「それじゃあ、何かサイドビジネスでもしていらしたのかしら？」

「それよりもっといい方法があるよ。経費をかけずに牧場を運営すればかなり儲かるはずだよ。つまり、さっきの搾乳機さ。あれは電気代もガソリン代もいらぬ。トラクターを調べればきつとエンジンがついてないだろうね」

「あなたはどこからそんなでたらめを思いつくんのですの？ 仮にそんな夢のような機械があったとして、どうして介蔵様だけが使っているの？」

「ボクは事実を言っているだけさ。少なくともさっきの写真に写っていた五人はその夢のような機械の扱いを知っているだろうね。彼らは失踪していた一ヶ月間で地球のものとは全く違う技術を身につけたに違いない。さっき、搾乳機をいじっていた時にあの警官がボクを怒鳴りつけたのは、ボクにその秘密を知られたくなかったからだと思うね」

「どうして、秘密にしなくてはいけませんの？」

「キミはドクター・ムスタファを知っている？」

「何ですのそれ？ 初耳ですわ」

「ボクはこの一年間、兄貴の失踪事件を独自に調べていたんだ。Little Mustaphaを調査していた兄貴はドクター・ムスタファの存在に気付いたようなんだ。そのころから彼の調査は何者かに妨害されるようになっていった。そして、最後には謎の失踪。恐ろしいよねえ」

「恐ろしいけども、それがなんだというの？」

「ボクが調べたところによると、ドクター・ムスタファは地底に宇宙人をかくまっているらしいんだ。そこで宇宙人たちとお互いの科学技術を交換しあっているということなんだ。かれらは、つまり宇宙人たちは地球の生命体に強い関心を持っているみたいで、いろんな動物を、人間も含めて、実験しているという噂だよ。数ある神隠し事件は彼らの手によるものだと思うね。面白いことにドクター・ムスタファによるものと思われる失踪事件があった前後には必ず謎の発光物体の目撃が報告されているんだ」

「ちよいと待つてくださいいな。それじゃあ、あなたのお兄さまはドクター・ムスタファに誘拐されたとおっしゃるの？」

「それは違うと思う。ボクの兄貴を誘拐したのはほかの連中さ。ドクター・ムスタファの存在を隠そうとしている人たちがいるようなんだ。それもかなりの権力を持った連中、つまり政府の人間だよ。ドクター・ムスタファの技術はかなりのお金を生み出すからね。それだけじゃない。使い方次第では、世界一強力な軍隊だって作れるはずだよ。そんなことは、大衆に知られてはまずいからね。ただ、この新聞の記事に関して言うと介蔵さんたちは明らかにドクター・ムス

タファに誘拐されているよ」

「それじゃあ、どうして介蔵様たちは無事に帰ってこられたのかしら？」

「彼らには切り札があったんだよ。つまり牛だよ。牛と引き替えに宇宙人の技術を手に入れたとしか考えられないよ」

「どうして、牛が切り札になるんですの？」

「人間は食べてもまずいけど、牛は実験の後に食べられる。ドクター・ムスタファは焼き肉好きなんだ」

「あらそうですの。なんだか解ったような、解らないような感じですよ。それがどうして、殺人事件に発展するということなんですの？ あなたのとおっしゃる政府の人間に消されたのかしら」

「それが解れば早いんだけどねえ……政府の人間ならこんな派手な人殺しはしないよ」

そこへ、モルダアの携帯電話にニコラス刑事から連絡が入った。牛舎から姿を消していた牛の死骸が見つかったらしいのだ。しかも現場から二十キロ離れた田んぼの畦道で。

「スケアリー、なんだか大変なことになってきたようだよ。キミは今すぐニコラス刑事のところへ行つて、牛を調べてきてくれ。それからこれが何なのかを調べて欲しいんだ」

モルダアは牛舎で見つけた一本の毛をスケアリーに渡した。

「ちよいと、何であたくしがあなたに指図されているの？ ちよつとモルダア！ お待ちなさい！」

モルダアはもう部屋の外に出てしまっていた。いまモルダアは「少女的第六感」だけで動いているのかも知れない。スケアリーは渋々モルダアの指示に従うことにした。

5

高原にある公民館

公民館に3人の老人が集まっている。その他には誰もいない。こんな公民館に集まらなくてもこの高原の高原村には高原の住人が集まれる場所はたくさんある。しかも、ここが一年前に禁煙になつてからは誰もここに来ることは

なくなつた。今では管理すらされておらず一見、廃墟のようなたたずまいである。

ここに居るのは、あの「村の若者五人組失踪事件」の五人のうち生きて居る3人である。これはなんだか怪しい雰囲気。

「おい、猛介さんよ。わしらは大丈夫なんかのう？」

一人が聞いた。猛介さんとは牛舎でモルダアを怒鳴りつけた警察官である。本名は牛ノ尻猛介（ウシノジリモウスケ）という。なんだか、こつちのほうは牧場主のようだ。きつとこの辺には土地柄、牛とつく名字が多いのだろう。ほかの二人の名前は……めんどくさいからいいや。どこかに牛という字がついて居るはずだ。

「心配すんな。これは単なる事故だよ」

「心配せずにおれるか。こいつは悪魔の仕業に違えねえ。森の悪魔が俺たちの計画に気付いたんだよ」

「馬鹿なこと言つてるんじゃないやねえ。だれもわしらの計画には気付いとらん」

牛ノ尻巡査はほかの二人とは違つて強気である。

「何も心配することはねえさ。高原署の鬼の猛介がこう言うんだから、間違いないよ」

「そこまで言うなら、安心だけでもよ。あの、都会から来た二人組は大丈夫か？」

「ああ、あれなら心配ねえ。あれはどうしようもないおとぼけ二人組だ。それよりも、ニコラスのやつが気になるな。あいつは以外といい勘していやがるから」

「最近赴任してきたあの刑事さんかい？ あいつなら大丈夫だよ。この村にとけ込もうと必死だからな。わしらに都合の悪いことをするはずがねえさ」

「そうか、それなら一安心だな。でもおまえら気をつけるんだぞ。この計画には村の将来が懸かっているんだからな」

「大丈夫、大丈夫。この計画を実行するまで何年かかっただと思つとるんだ。こんなところで、失敗なんかするはずがねえ」

「もし、わし以外の警察が来て介蔵じいさんのことを聞かれても、何にも話すんじゃないやねえぞ。何にも知らないことししておくんだ。後は鬼の猛介がうまいことごまかしておいてやるから」

牛ノ尻巡査は念を押すようにそう言う公民館から出ていこうとした。

「おい、どこ行くんだ？」

「警察の仕事さ。ヤツらがよけいなもん見つけないよう見張つてないといかんからな」

牛ノ尻巡査を見送つた二人はまだ公民館の椅子に座つて居た。二人はまだどこか不安そうである。二人はお互い何も

しゃべらずにただ座っている。しかし、考えていることは二人とも同じ。介蔵じいさんと梅子ばあさんの身に起こったことと同じことが自分たちにも起こるんじゃないか、ということだった。二人は黙ってタバコに火をつけた。禁煙のほずの公民館は皮肉なことにタバコをいくら吸っても注意する人間すらいない。

公民館を出た牛ノ尻巡査も内心は心配していた。介蔵じいさんの死は事故によるものなどではない。何か起きたのだ。森の悪魔？ いや違う。そんなことはあるはずがない。牛ノ尻巡査は努めて森での失踪事件のことは考えないようにした。いまはなんとしても計画を進めなくてはいけないのである。

公民館の駐車場に止めてある車に乗り込むまで冷静になろうと必死だった牛ノ尻巡査は、公民館の裏山のでっぺんからサルが彼を見ていたことには気付かなかった。

6

高原村、観光名所の売店

「マダム、高原ソフトクリーム一つ。ミルクとラズベリー、ミックスで」
モルダアが妙に気取って注文している。

「あら、あんたもテレビに出てるひとかね？」

「違いますよ。ボクは「HB」の優秀な捜査官です」

「えふびる？ なんだいそりや？ まあ何でもいいや。あんたスーツなんか着てるからテレビの人かと思ったよ。さっきなあ、何とかっていうニュース番組の何とかって有名なりポーターが来てなあ。サインくれて頼んだのに、断られちゃったのよ。ホントにテレビじゃあいい人なのになあ。あんな無愛想だとは驚いちゃったよ。」

「何とかじゃ、解りませんよ」

「それにしても、恐ろしい事件だったなあ。あの介蔵のあんちゃんがなあ」

「介蔵さんのことを知っているんですか？ マダム」

モルダアは一応聞き込みをしているらしい。

「そりゃあ、知ってるさ」

売店のおばちゃんがモルダアにミルクとラズベリーミックスのソフトクリームを渡してから話し始めた。

「介蔵のあんちゃんわたしより十も年上なだけどなあ、昔はよく一緒に遊んだもんさ。まあ、こんな小さい村じゃ子供はみんな友達みたいなもんだから、介蔵のあんちゃんが特にわたしを可愛がつてくれてたわけでもないんだけどな。それでも、毎日山登ったり、川で泳いだり、よく遊んだもんだ。でもな、わたしが小学校の上級生になったぐらいかな。介蔵のあんちゃんが急に遊んでくれんようになってな。家にもりつきりになったみたいないな感じだったわなあ。ご両親の話では人が変わっちゃったように勉強してることだったよ。これは、後で知ったことなだけどな。ちょうどそのあたりがああ失踪事件の頃だったんよ。あんた知ってるだろ、失踪事件」

売店のおばちゃんはモルダアの答えも聞かずに後を続ける。

「それからというもの、身体が丈夫なだけ取り得てほかはまるつきり駄目だった介蔵のあんちゃんがな、村一番の優等生になっちゃったのよ。わたしは一度介蔵のあんちゃんに聞いたことがあんだけどなあ、介蔵のあんちゃんは偉い学者さんになって、世界をびくりさせるような発明をするんだとか言ってたよ。でも、結局学者さんにはならず、牧場やることになったんだけどねえ。何でも、それが猛介のあんちゃんが裏でいろいろやってたらしいよ。猛介のあんちゃんは、介蔵のあんちゃんが学者になることに何故か反対しててね、無理矢理介蔵のあんちゃんと梅子さんを結婚させて、介蔵のあんちゃんが牧場主になるようにしむけたらしいよ。それでも、介蔵のあんちゃんは学者になることは諦めなかつたみたいでねえ。梅子さんから聞いたんだけど、つい最近までなんだかすごいことを研究していたみたいだよ。この村の全員が大金持ちになれるかも知れないって、言ってたのにねえ。ホント、死んじまってがっかりだよ」

「へえ、そうなんですか。ところでマダム……」

モルダアの手からソフトクリームがカップだけ残して落ちていった。おばちゃんの話が長くてソフトクリームが溶けてしまったらしい。

「あらいやだよ。あんた、早く食べないからせつかくの高原ソフトが台無しじゃないか」

「すいません、マダム。ところで、猛介のあんちゃんって誰ですか？」

「あんた、猛介のあんちゃん知らないのかい？ 高原署の鬼の猛介だよ」

鬼の猛介と聞いてモルダアはピンと来た。あの警察官に違いない。モルダアを怒鳴りつけ、そして失踪事件の写真にも

写っていたあの警察官。鬼のという肩書きのつくやつはすぐに人を怒鳴りつけやがるんだ。それにしても、鬼の猛介はちよつと気になる存在だなあ。モルダアの「少女的第六感」が働き始めた。しかし、モルダア自身あの怖い警察官はちよつと苦手であった。

「マダム、猛介さんはどうして介蔵さんを学者にさせたがらなかったんでしょうか？」

「さあねえ。あの失踪事件があつてからあの五人はどっかおかしい感じだったからねえ。村のもんはみんな森の悪魔に取り憑かれたなんて言つて馬鹿にしてたけどねえ。この村じゃあ、昔から森に悪魔がいるつて言い伝えがあつてなあ……。ほら、これ新しいソフトクリーム。ミルクが切れちゃつたからワサビとラズベリーのミックスだよ」

ワサビとラズベリーとはなんだかいやなミックスであつたが、モルダアはおぼちゃんの親切心を踏みにじつてはいけな
いと思ひ笑顔で受け取つた。

「ありがとう、マダム。それに、貴重な話も聞かせてくれて。それじゃあ、マダムごきげんよう」

「おい、こら、泥棒！ 待ちなさいよ。ちゃんと二個分の代金払つていきなよ」
なんだ、サービスじゃなかったのか。

7

タバコの煙たちこめる公民館の一室

「わしは心配だよ。やつぱり計画は中止にすべきなんじゃないか」

「何言つてんだよ。いまさら止めてどうすんだい。わしらの人生の半分を賭けてやつてきたことじゃないか。まあ、介蔵さんは気の毒だったなあ。あいつがいなきや、この計画は実現不可能だったんじゃないから。それにしても、不思議な話だよなあ。わしはあのとときの事がいまだに信じられんよ。わしらの目の前で介蔵さんの脳みそが半分、別の脳みそと……」

「おい！ その話はするんじゃないよ。誰かに聞かれたらどうする」

さつき牛ノ尻巡査と別れた二人はまだ公民館の部屋にいた。二人ともここに居たいわけではなかった。しかし、二人は

なるべく外には行きたくなかった。どこにいても不安なことには変わりはないのだが、なるべく人目に付かないところに居たかっただけである。二人はまたしばらく黙っていた。この廃墟のような公民館に重苦しい空気が流れる。

「猛介さんかい？」

一人が何かの気配を感じてドアの外に向かって声を上げた。

「誰もいやしないよ。猛介の仕事は夜中まであるんだ」

「そんなことはない。外に誰か居るんだ。物音が聞こえたんだ」

本当は二人とも物音を聞いていた。聞いたとしてもそれが空耳か風の音だと思いたかったのだ。ただ、思えたとしても、現実には変わらない。物音は少しずつ二人のいる部屋に近づいてきている。二人はほとんど同時につばを飲み込んだ。

「誰かいるのか！」

一人が大声で怒鳴った。外からは何も聞こえてこない。静けさが戻った。この不気味なほどの静けさが何よりも二人を安心させた。

「何だ、誰もいないよ。風のいたずらつてやつだよ」

落ち着いた二人はまたタバコに手をのぼし、火を点けようとした。ちょうどそのとき、部屋のドアが静かに開いた。二人は飛び上がった。ただ立ち上がったただけなのだが、あわてた二人はお互いが飛び上がったように見えたに違いない。

ドアのところには、何かが立っている。廊下の窓から差し込む西日でその顔はほとんど影になっていたが、それが人間の影の形ではないことは誰にでも解った。

「悪魔だ……」

一人がほとんど声にならない声でつぶやいた。ドアのところの影が静かに部屋の中へと入って来た。それが近づくにつれて、次第に容姿が明らかになっていく。それは悪魔と言うよりも、モンスターといった方が良さそうな生き物である。体が灰色の毛に覆われている。皮膚が見えているのは顔の部分だけである。外見はまるでニホンザルそっくりなのだ。体長は二人よりも目線一つ分ぐらい大きい。そして、まるで人のようにきれいな姿勢で二足歩行をしている。それ以上に人のようなのがその顔である。皮膚の色が赤いことをのぞけばそれはまるでつきり人間の顔そのもの。澄んだ、黒い目で二人をまっすぐに見つめている。その顔は何か薄気味の悪い笑みを浮かべているようにも見える。

このモンスターに見つめられた二人はただカタカタと音を立ててふるえていた。口を動かして何かを言おうとしているが、音が出てこない。モンスタルの手に握られたものを見てそいつが何をしようとしているか解ったからだ。

モンスターが静かに右手を挙げると手にしていた銃を二人の胸めがけて撃ち込んだ。胸に一発ずつ。二人ともほとんど同じ場所を撃たれた。見事な腕前！ と感心している場合ではない。二人はばたりと倒れるとそのまま動かなかった。モンスターは持っていた銃を二人の前に投げ捨てて、その場を去った。公民館を出て、裏山へ去っていくモンスターの後にサル群が続いた。

田んぼの畦道で見つかった牛の解剖を終えたスケアリーは廊下でモルダアの姿を見つけた。窓の外を眺めて何か考えているようである。

「ちよいとモルダア、いままで何をしていたの？」

モルダアはスケアリーを見てキャツと情けない悲鳴を上げた。スケアリーは牛の解剖を終えたばかりで白衣は血だらけだった。

「なんだよそれ。キミ血だらけだぞ」

「当たり前ですわ。それより、あなたのそれは何ですの」

スケアリーの視線はモルダアのワイシャツに向けられている。ワイシャツにはソフトクリームをこぼしたシミが沢山ついている。

「これは……いや、なんでもない」

危うく一人でソフトクリームを食べたことを話してしまうところだった。

「ウシさんの解剖はとっても大変でしたのよ。それから、介蔵さんの解剖もしましたのよ。なんだかとってもエキサイティングな解剖でしたわ」

「キミは何でも解剖するんだねえ」

「あたくしは無免許ですから。無免許に限界はありませんのよ」

「????」

「介蔵さんの遺体、ご覧になりますか？ まだ縫い合わせてないからいろんなところが見えますわよ」

「いやあ、今日のところは遠慮しておくよ。それより、何か解ったのかい？」

「あなたに、お伝えする事は沢山ありますわよ」

スケアリーは血まみれのゴム手袋をモルダアのほうに差し出した。モルダアはまた悲鳴を上げてのけ反った。それを見てスケアリーはなんだか嬉しそうである。スケアリーは早くもモルダアの弱点を発見したようだ。

「それじゃあ何からお話しいたしましょうか？」

「何でもいいから、重要なことからお話ししてくれないか」

「それじゃあ、お話しして差し上げますわ。まず一つ目は、介蔵さんはなかなかいい体をしていましたのよ。なんだか切り刻んでしまうのがもったいなかったんですのよ」

「それで？」

「それだけですわ」

「それだけって、そんなことが一番重要なのか？」

「あら、あたくしには重要なことですよ。それじゃあ二つ目は、介蔵さんの頭蓋骨に小さな穴があいていましたのよ。肉眼ではほとんど見えないくらいの小さな穴でしたわ。過去の記録を見ても介蔵さんには特に病歴もありませんし、怪我をして治療をした記録もありませんでしたわ」

「それこそ重要な事じゃないか。それで、キミの意見ではその穴は何なんだ？」

「あたくしの意見では、その穴は小さな穴ですよ」

「????」

「それから、ウシさんのほうですけど……」

「ちよつとまで！ 小さな穴とはどういう事だ？ キミはただ遺体をバラバラにしただけでなんにも考えていなかったのか？」

「まあ、なんて事をおっしゃるの。あたくしは普通の人では気がつかないような小さな穴を見つけたんですのよ。それだけでも大変なことなんですのよ。何でしたら、あなたがもう一度遺体を調べてみてはいかが？」

「それは、ちよつと、無理だけど……」
モルダアが小さくなつていく。

「こんな事は考えられないかな。その小さな穴から介蔵さんの脳に何らかの処置を施した可能性はないかな」

「さつきも言つたように、介蔵さんには頭部への外科手術の記録はございませぬのよ。それにあんな小さな穴から脳の手術をするなんて不可能ですわ」

「地球上の技術ではね」

「あらいやだ。またそんなこと言つて」

「介蔵さんの脳は調べたのか？」

「まあ、ざつとは調べましたわ」

「もつと詳しく調べてみてくれないか。きつと何かがあるはずだ」

「あなた、またあたくしに命令して。何様のおつもりですか？ まあ、いいですわ。そのうち調べて差し上げますわ」
そのうちじゃ困る。モルダアは言いたかつたがスケアリーの機嫌が悪くなっている事に気付いていたから止めることにした。きつとこの女は怒るとすごく怖いに決まっています。

「それから、あなたに頼まれていた毛の分析結果が 나왔ましたわ。あのフォークについていた毛は人間のものではないそうですわ。DNAを調べた結果 *Macaca Fuscata* に近い動物のものらしいんですの」

「真つ赤つか？ なんだったって？」

「*Macaca Fuscata* ですわ。日本名はニホンザルと言うらしいわ」

「言うらしいわ、つて。始めつからニホンザルつて言つてくれよ。それよりも今、近いつて言つてたよね。つまり、ニホンザルではないということなの？」

「そういうことになりますわ」

「じゃあ、なに？ 日本にサルは他にいないからねえ。新種のサルかなあ」

スケアリーは困つた顔をしている。彼らは今、未知の生物の存在を示す証拠を手に入れている。しかし、それを認めてしまつたら、モルダアを喜ばせるだけである。スケアリーの困つた顔を見たモルダアはすでに何かを感じていたようだ。モルダアの頭の中はドクター・ムスタファが宇宙人の技術で作りに出した謎の生物の事でいっぱいである。

「それよりもモルダア。あなたは何をしていたの？ ソフトクリームを食べていただけ、なんておっしゃつたら承

知いたしませんわよ」

やばい、ばれている。でも大丈夫。モルダアはちゃんと事件の手がかりを手に入れていた。ポケットから何かのパンフレットを取り出してスケアリーに手渡した。そのパンフレットにはこう書かれている。「高原村高原ファミリー・ランド&高原ファミリー・シー」——大規模なレジャー施設を作る予定らしい。

「これは例の失踪事件の五人の家を回つてるときに見つけたんだ。書斎の引き出しの奥の方に嚴重にしまわれていたんだよ」

「あなた、令状もなくよくそんなことが出来ましたわね」

「えっ、令状なんかいるの？ 家に行ったら誰もいなかったから勝手に入って探して来ちゃったよ。それじゃあ、これを見つけたことは内緒ね。それよりも、おかしいと思わない？」

「何がですか？」

「このレジャーランド、例の五人が作るうとしてたものらしいんだ。ボクはある人から介蔵さんたちが何かを計画していると聞いていたけど、レジャーランドとは驚きだねえ」

「よろしいと思いますわよ。あたくし遊園地は大好きですから」

「それはいいんだけどね。これだけの施設を作る金がどこにあると思う？ この村にあるお金、全部出しても半分も作れないはずだよ。それなのにこんな計画を立てるといふことは、彼らには大金を手に入れる手段があったということだよ」

「どんな手段かしら？」

「彼らが身につけた技術をどこかの政府とかテロリストとかに売るんだよ。考えられなくはないねえ」

「まあ！」

スケアリーは驚いたのか、それともあきれたのか、よく解らない。

「そういえばさつき、牛のこといおうとしてなかった？」

「そうですね、忘れるところでしたわ。牛の背中にこんなものが埋め込まれていたんですのよ」

スケアリーは透明のプラスチック製のケースをモルダアに見せた。中には小さな金属の固まりが入っている。

「このスポーツカーの形をした金属は、ボクにはグリコのおまけに見えるけど」

「この金属は地球上には存在しないものよ」

「ということは地域限定グリコってことか?!」
「そういうことね、モルダア」

9

「スケアリー、ボクはこれから森へ行ってみようと思ってる」

「あら、そうですね? それじゃあ、あたくしは旅館に帰って温泉にはいることにいたしますわ」

「あれ、なんだ。キミは来ないのか?」

「あたくしは森へなんか行きませんわ。大事なお洋服が汚れてしまいますから」

こういう仕事に大事なお洋服なんか着てくるな! モルダアは頭の中で怒鳴ってみた。ちょっと虚しい。しかし、困ったことになった。モルダアはつきりスケアリーと一緒に来るものだと思っていたが、一人で森へ行くのは怖い。もう陽はほとんど暮れている。今さらスケアリーに頼む訳にもいかないし……。モルダアは考えていた。「ボクの天才的直感」はボクに森へ行くと命令しているが、これは正しい事なのか? もしかすると森へ行ってもなんにもなくて無駄足に終わるかも知れない。それだったらわざわざ森になんて行かなくても……。いやいや、駄目だ。ボクは優秀な捜査官。ボクの直感が間違っているはずはない。でもどうしよう。きつと森は危険でいっぱいではない。そうだ、あのニコラス刑事を連れて行けば……。それは駄目だ。ボクはああいうタイプの人間は好きじゃない。悔しいがあいつは一枚目だ。女たちはいつだってあんな感じの男とつきあいたいと願うんだ。その願いが叶わなかったときの妥協として、僕等がいるんだ。全くやりきれないな。ボクはマイホームの代わりの自動車。フランス料理の代わりのファミレス。メロンの代わりの柿。でもボクには解ってるぜ。きれいな身なりをして、出来る男を気取っているみたいだけど、どうせどっかへまをやらかしてこんな田舎に左遷されたに違いない。一流なのは顔だけで後は全部三流なのさ」

モルダアが、どうしてニコラス刑事と一緒に森に行きたがらないかよく解らないが、まあ毛嫌いというやつだろう。モルダアは一人で森へ行くことにした。

悪魔の住む森

モルダアが森に着いた頃にはもうすっかり日が暮れていた。そこは森というより小さな山といった方が良さそうなところである。この地域が山間にあるので、そこら中が森のようであるし、山のようにもある。山に見えても住人が森とさえばそれは森なのである。森の入り口でモルダアはちよつと尻込みをしている。夕方から吹き始めた強い風が森の木々を揺り動かしている。森の外から見るとまるで森全体が一つの巨大な生き物のように見えた。モルダアは手足が震え出さないように一つ大きく息をして歩き始めた。森の中へ入ったモルダアは以外と落ち着いていることに自分でも驚いた。暗い森の中を懐中電灯の明かりを頼りに奥へと進んでいく。しかし、モルダアはどこへ行けばいいのか解っていないのだろうか？ 多分解っていない。本当は怖がっているのかも知れない。怖くてそんなことは気にしていられないだろう。

モルダアの恐怖感森の中を歩き回った疲労のためか、次第に薄らいでいった。モルダアが時計を見るともう、森に入ってから一時間がたっている。「そろそろ、何かが出てきてもいい頃だけど」そう思つて、モルダアは立ち止まって辺りを見回してみた。この先をさらに進むともうすぐ森から出てしまふような感じである。右側は木が生い茂つていてとても入つていけそうにない。左はほとんど崖のような急な斜面が下つている。「やつぱり何も無いのかな」モルダアは引き返そうとしたが、思いとどまった。そして、崖のすれすれまで慎重に進んで下をのぞいてみた。やはり彼の「少女的第六感」は本物なのだろうか。モルダアは崖の下に動くものを発見した。

「恐怖の人間サルだ！」モルダアの目に映つたのは全身毛むくじやらの生物。介蔵じいさんとあの二人を殺した森の悪魔である。モルダアは自分の説を裏付ける未知の生物の発見にかなり興奮しているようだった。それにモルダアは「恐怖の人間サル」という名前まで考えていたらしい。それにしても、他にもつとよい名前があるはず。イエティ、野人、恐怖の人間サル。どう考えても恐怖の人間サルではおかしい。これでは森の悪魔がかわいそうだ。

モルダアは双眼鏡を取り出して、崖の下を覗いた。真つ暗で何にも見えない。「くそ、このバカ双眼鏡め！」モルダ

アは双眼鏡を振つてからもう一度覗いた。振つて見えるようになる訳はないのだが、人は夢中になるとよく解らない行動をするようである。モルダアは双眼鏡を諦めて、肉眼で下の様子を見ることにした。このとき後ろから人影が近づいていることにモルダアは全く気付いていなかった。

崖の下では恐怖の人間サルが、ニホンザルの群を操つて何かの作業をしている。どうやら下には洞窟の入り口があって、サルたちはそこに何かを運び込んでいるらしい。恐怖の人間サルは身振りや指示を出していたが、驚いたことに時々人間の言葉を使った。もちろんサルたちが人間の言葉を聞いて行動するわけではない。それはどちらかというところの恐怖の人間サルの独り言に近いものだった。恐怖の人間サルはサルたちの様子を見ながら「早くしろ」とか「もたもたするな」とか言っているのである。恐怖の人間サルはほとんど人間と変わらない思考をするようだ。

モルダアは崖の上で腹這いになって下を覗いている。先ほど彼に近づいてきた人影はモルダアから少し離れた木の後ろでモルダアの様子をうかがっている。モルダアは下がよく見えないためか、崖から身を乗り出しては落ちそうになつて、少し戻るといったようなことを繰り返していた。

やがてサルたちの仕事が終わると、恐怖の人間サルを先頭にサルたちは洞窟の中へと消えていった。これを見たモルダア、どうするのかと思つたら、どうやら洞窟の中に入ろうと決心したようだった。モルダアは時々男らしい。しかし、そんなときに限つてうまくいかない。モルダアが立ち上がったときだった。

「動くな！ この変態野郎！」

モルダアのすぐ後ろに警察官が立っている。モルダアは驚いて両手を上げてしまつてから後悔した。「しまった、こういう時は手帳を取り出して、エージェントだ！ つて言うんだつた」

まあ、そんなことを言つても効果はないと思うが。

「おまえだな、覗きをしてたのは」

「へっ？」

「へっ、じゃない。さつき旅館から露天風呂を覗いてるヤツがいるつて通報があつたんだ」

モルダアが崖の下ではなくもう少し上の方を見ると、旅館の明かりが見えた。

「あれ、なんだ。ここは旅館のすぐ裏だったのか。ボクはここまで来るのに一時間も歩いちゃいましたよ」

「とぼけようつたつて駄目だぞ。ちよつと一緒に署まで来い」

「何言つてるんですか。犯人が見つかつたんですよ。今すぐ下の洞窟に行かないと。あなたは重大なミスを犯すことに

なりますよ」

「犯人なら今捕まえたよ。私の任務は覗きの犯人を捕まえることなんだからな」

「ボクは覗きなんかしてませんよ。殺人事件の捜査ですよ」

「旅館の裏で双眼鏡持って殺人事件の捜査とは、大した嘘をつくもんだ。いいから、一緒に来い！」

警察官がモルダアの腕をつかんでねじり上げた。モルダアはアヒヤヒヤヒヤヒヤ、とよく解らない悲鳴を上げていたが、そのまま警察官に引つ張られて、パトカーのところまで連れて行かれ、高原署へ向かうことになった。

11

再び高原署

両脇を警察官に抱えられて高原署に入ってきたモルダアは入り口のところで勤務を終えて帰宅する牛ノ尻巡査とすれ違った。牛ノ尻巡査はモルダアの方を見ながら近くにいた若い警官に聞いた。

「あいつ森にいたのか？」

「ええ、覗きの犯人がやつと捕まりましたよ。捕まえたときには殺人犯を見つけたなんて嘘を言ったらしいですよ。まったく、ああいうふうにはなりたくないですよねえ」

牛ノ尻巡査はこれを聞いて少し顔をこわばらせたが、そのまま黙って外へ出ていった。

取調室ではモルダアが事情を説明するのに苦労していた。恐怖の人間サルの話など誰も信じてはくれない。取調室の外では精神科の医者と呼ぶべきかどうか真剣に話し合っていた。

「だから、さつきから言ってるように恐怖の人間サルがいたんですよ。今すぐ行って調べてくださいよ」

「解ったよ。明日調べてきてやるから」

「明日じゃ駄目ですよ。今行かないとヤツらはどこかに行っちゃうかも知れない」

「ヤツらっていうのはキミの覗き仲間のことか？」

「違いますって。サルの群れとその親分の恐怖の人間……」

そこへスケアリーとニコラス刑事が入って来た。「最悪だ」モルダアが誰にも聞こえないようにつぶやいた。ニコラス刑事のヤツは心配そうな顔をしているが、絶対に心の中で笑ってるんだ。ボクが天才的頭脳を使ってもう少しで犯人を捕まえられるというところまで漕ぎ着けたのに、このニコラス刑事の野郎が台無しにするんだ。モルダアはほとんど泣きそうである。

「何してたんですか、モルダアさん。まさかホントに……」

ニコラス刑事が先に言いかけたが、すぐにスケアリーに邪魔された。

「ちよいとモルダア！ あなたがあたくしの事に興味があつて、あたくしのゴージャスなボディーをご覧になりたいのは解りますけど、覗きなんていうのは卑怯じゃありませんこと？ 見たければ見たいとはつきりおっしゃってくださいよ」

「キミは僕が見たいと言ったら見せてくれるのか？」

スケアリーは否定する代わりにモルダアにパンチを浴びせた。モルダアは驚いて言葉が出てこない。

「スケアリーさん、それはやりすぎですよ。モルダアさんが犯人と決まったわけではないんですから」

「あら、失礼いたしましたわ。あたくし、取調室の容疑者を見るとつい暴力を振るいたくなってしまうんですよ。ウフフッ。ダーティーハリーならぬダーティースケアリーってとこですわ。ウフフッ」

「モルダアさん、いったい森で何をしていたんですか？」

「捜査に決まっているじゃないか。スケアリー、ボクはヤツを見つけたんだ。恐怖の人間サルを」

「恐怖の人間サル？」

二人が同時に聞き返した。

「例の毛の持ち主だよスケアリー」

スケアリーは何のことだか解つたがニコラス刑事は何がなんだか解らない。モルダアは介蔵じいさん殺害現場で見つけた毛のことをニコラス刑事に説明した。

「本当ですか？ スケアリーさん」

どうしてスケアリーに聞くんだ？ ボクが信じられないって言うのか？ どうやらモルダアはニコラスが何をしようと思に入らないらしい。すべてはモルダアの思いこみなのだが。

「本当ですわ。ニコラス様」

ニコラス刑事は頭を抱えている。モルダアはちよつと得意になっている。

「ボクの考えでは少なくともあと3人の命がねらわれていると思うね。犯人はこの村で起きた失踪事件の関係者を狙っているはずだよ」

「どうしてそんなことが言えますの？」

「黒幕がどこの組織の人間かは解らないけど、いずれにしろあの五人が手に入れた技術が外に漏れることは望んでいないはずさ」

「その技術つて言うのは何なんですか？」

ニコラス刑事は半信半疑ながらも興味を示したようだ。

「介蔵さんの家に行つて搾乳機やトラクターを調べてみれば解るよ、ニコラス刑事さん」

それを聞いてニコラス刑事は渋い表情になった。実は介蔵じいさんの家は先ほど何者かの手によつて放火され、家にあつたものはほとんどが灰になつてしまつたのである。

「うーん、困つたなあ……」

ニコラス刑事を困らせてモルダアはかなり元氣を取り戻していた。しかし、放火とはどういう事だ？ 謎の組織の仕業か？ モルダアも少し困つてしまつた。そのとき取調室のドアが開いてニコラス刑事が呼び出された。何か事件があつたようだ。ニコラス刑事と一緒にスケアリーも部屋を出ていく。「おい、キミのパートナーはそいつじゃなくてボクだぞ！」モルダアはまた少し落ち込む。

しばらくして、スケアリーだけが戻つてきた。

「モルダア、二人が遺体で発見されたようですわ」

「やつぱり、ボクの言つたとおりじゃないか」

モルダアがすつと立ち上がつて目を輝かせた。

「それでどんな状況なんだ？」

「今、ニコラス刑事様が現場に向かつていらつしやるわ。それからあなたはもうここを出てもいいそうですわよ。覗きの件は目を改めて取り調べをするらしいですわよ」

あれだけ説明してもまだモルダアの容疑は晴れていないようだ。

「ところでモルダア。二人ってどなたなの？ お名前はなんとおっしゃるの？」
「まあ、それはいいじゃないか。きつと牛という字がつく名前だよ。そんなことより、ボクはもう一度あの森へ行つて来るよ」

「そうですね。それではあたくしはステキなニコラス様のところへ行つてまいりますわ」
また一人だ。まあいいか。犯人はそつちにはもういない。森の洞窟に潜んでいるんだ。

12

公民館

二人の遺体はほとんど同じ格好で部屋の壁に寄りかかるようにして並んでいる。二人とも目を開けたまま死んでいる。森の悪魔に銃を向けられたときの表情がそのまま凍り付いてしまったようだ。遺体の周りには先に到着した警官が数人いたが、この異常な事態に何をすればいいのか解らないといった感じである。

ニコラス刑事とスケアリーが到着した。二人が部屋に入ってくるのを見た警官の一人が彼に近寄ってきた。

「刑事、大変なことになりますよ」

警官は内緒話でもするように小さな声で言った。

「どうしたんだ？」

「それがすねえ……」

警官はスケアリーの方を見て言うのを止めた。部外者には聞かれないと言った感じである。

「この人なら大丈夫だ。『ロビー』のスケアリー特別捜査官だ。我々に協力してくれているんだ」

スケアリーは得意げな顔をしている。警官はまだ信用できないといった目つきでスケアリーを見ていたが、仕方なく先を続けることにした。

「二人の被害者は銃で撃たれているんですが、それが……」

「それが、何だ？ はっきり言いたまえ緊急事態なんだぞ！」

ニコラス刑事の厳しい態度にスケアリーは思った。「すてき……」
警官は思いきつてニコラス刑事に続きを話した。

「二人を撃った銃は警察で使われている銃です。もつと厳密に言うとなんか銃だつたんです」

「何だつて？ 牛ノ尻巡査の銃!？」

ニコラス刑事は混乱した。モルダアの言うことが正しいのなら牛ノ尻巡査は命を狙われているはずである。それが何故、彼が殺す側の人間になるんだ？

「キミ、牛ノ尻巡査に連絡は取ったのか？」

「ええ、さつきから電話していますけど出ません。まあ、当たり前ですかね。えへへ」

警官はニコラス刑事の質問に気楽な感じで答えている。ニコラス刑事は明らかにいらだっている。この二人の死亡推定時刻と牛ノ尻巡査が外出していた時間はほぼ一致する。ただし、それだけで牛ノ尻巡査を犯人と決めつけるわけにはいかない。

「ああ、そういえば……」

さっきの警官が何かを思い出したようだ。

「さつき、牛ノ尻巡査が帰宅するときボクはちょうど署の出入り口のところにいたんですよ。あの何とかいう捜査官が覗きで捕まった時ですよ。牛ノ尻巡査が署を出てしばらくして、また外を見たら牛ノ尻巡査の車はいつもと違う方向に走っていたみたいでしたよ。暗くて良くわかんなかったけど、あれはおそらく牛ノ尻巡査の車でしたよ」

「まあ、きつと逃げるおつもりなんですわ。早く追っ手を！」

「あの道を行つても遠くには逃げられません。森に突き当たって行き止まりですよ。でも何でまた森になんて行くんです。もしかして牛ノ尻巡査も覗きをするんじゃないか」

「キミは天才だよ」

ニコラス刑事はお気楽な巡査に向かってつぶやいた。

「スケアリーさん、ボクは森に行くよ。あそこにはきつと何かがある」

ニコラス刑事は颯爽と部屋を後にした。彼はスケアリーもついてくるものだと思つたが、彼女は来ていなかった。やはり服は汚したくないらしい。

「それじゃあ、あたくしはもう一度温泉にでも入りましょうかしら」

13

森

モルダアは再び森の中を一時間近く歩き続けていた。恐怖の人間サルを目撃した場所へは旅館の裏から行けばすぐなのに、何故か一度目と同じ道のりを歩いている。こうして息を切らして森の中を歩いた方が臨場感が出る、というのが理由のようだ。モルダアは恐怖の人間サルを見つけた場所の近くまで来た。ここから上に進めば崖の上。下に行けば洞窟の入り口へ行けるに違いない。ここで、モルダアは尻込みをしている。よく解らない自信と勢いだけでここまで来てしまったけど、本当に一人で行って大丈夫なのだろうか。モルダアは銃など持っていないし、護身術を身につけているわけでもない。そんな人間が恐怖の人間サルが潜んでいる洞窟に入っていくって無事でいられるはずがない。「まあ、いさ。いざとなったら道を間違えたとか言っでごまかせばいいんだ」そんな言い訳が通じるはずはないのだが、モルダアの「少女的第六感」がモルダアの足を前に進ませるのだから仕方がない。

洞窟の入り口の方向は周りよりも暗く感じられた。木の生え方が他とは少し違うようだ。外から見てもここに洞窟があると気付かれないようになってきているのかも知れない。立ち止まって見ると木々が巧いこと視界をふさいで遠くまで見通せないようになってきている。「なるほど、よくできているもんだ。それにさっきの崖の上からだつて、普通の人ならまず始めに旅館の明かりに目がいく。それから露天風呂。下に洞窟があるなんて絶対に気付かないな」モルダアは一人でブツブツ言っている。こうすることによって何とか自分を落ち着かせようとしているのかも知れない。でも、そんなことをしたところで迫り来る危険からは逃れることは出来ない。

モルダアの目の前の大木の後ろから突然、大きな影が飛び出してきた。「あつ、恐怖の……」モルダアが名前を言い切る前にその影はモルダアに襲いかかってきた。怪物に体当たりされたモルダアは簡単に突き飛ばされて落ち葉の上の背中から落ちた。次の瞬間、怪物はすでにモルダアに馬乗りになっていた。モルダアは暗闇の中で怪物の目がぎらぎら

輝いているのを見て、何かに気付いたようだった。ただ、今はそんなことを考えている場合ではない。怪物は両手でモルダアの首をしめ始めた。

「悪いがな、おまえさんは知りすぎた。こうするしかないんだ。かんべんしろよ」

モルダアは意識が遠のく中で怪物がこう言ったのを聞いた。モルダアの視界が次第に狭くなっていく。優秀な捜査官、こんなところで最期を迎えてしまうのか。いやいや、そんなはずはない。森の中に一発の銃声が響いて、怪物はどきりと倒れ込んだ。モルダアはその隣にうずくまってむせかえっている。

「大丈夫ですか、モルダアさん」

ニコラス刑事だ。

「モルダアさんの言うことを信じて来てみたんですが、危ないところでした」

ニコラス刑事はいい人だ。命の恩人だ。モルダアはニコラス刑事に抱きつきたい気持ちをごらえるのに必死だった。優秀な捜査官は命の危機にも動じてはいけけないのだ。決して抱きついたりなどしてはいけけない。

「これが例の恐怖の人間サルですか？」

モルダアが黙っているのでニコラス刑事が聞いた。

「いや、これは違うよ」

モルダアが倒れている怪物の首のところをつかんで皮を剥いだ。中からは牛ノ尻巡査の顔が出てきた。この怪物は着ぐるみを着た牛ノ尻巡査だったのである。

「なんて事だ。それじゃあ、今回の事件は全部牛ノ尻巡査の犯行だったのか？」

「いや、そんなはずはないよ。ニコラスさん。この着ぐるみは……」

そこまで言うともルダアは坂の上に動くものを見つめて固まってしまった。ニコラス刑事がその方向を見るとそこにはもう一体の怪物の姿があった。二人がその存在に気付くと怪物は逃げ出した

「まだいたのか。おい待ちやがれ！」

ニコラス刑事は銃を抜いて怪物を追った。モルダアも後に続くこうとして、腰を少し浮かせた。ところが、牛ノ尻巡査の毛むくじやらの腕が素早く動いてモルダアの胸ぐらをつかんだ。

「きやあ、助けて！」

モルダアは叫ぼうとしたが、声が裏返ってしゃっくりのような音しかしなかった。

「安心しろ。もう、あんたを殺そうとはしない」

牛ノ尻巡査が苦しうに言った。モルダアはこの苦しうな喋り方が演劇じみててやだなあと思ったが、本当に苦しいのならまあいいか、とも思った。いずれにしろ、こんな時に思うことではない。

「ヤツらはわしらより何枚もうわてじやつた。わしらで何とか出来ると思つたのが間違いだつたんだ。若い、おまえさんは真実を知りたいんじゃないやろう？　だがなあ、世の中には知つてはいけないこともあるんじゃないよ」

「それは、失踪事件と関係があることですか？」

「そこまで、知つていたか。仕方がない。おまえさんには本当のことを話すでしょう。わしはおまえさんを殺そうとした。これがせめてもの償いじゃ」

モルダアはそんな償いよりもつといいものをもらいたかつたが、死にそんな男からそんなものはもらえないだろう。仕方がないので話を聞くことにした。

「すべての始まりはあの事件じやつた。わしら五人はこの森にキャンプに来たんじゃ。もちろんそのときはここにヤツらがいることは少しも知らなかつた。新聞には道に迷つたと書いてあつたがな、あれは嘘じゃ。わしらが子供の頃から遊んでるこの森で迷子になるわけがねえ。わしらは一晚キャンプをして帰る予定じやつた。そんな事はわしらには普通の遊びじやつた。ところがあの番だけは妙な胸騒ぎがしてなあ。悪い予感の中じやつた。夜中に目を覚ますとわしらは突然光に包まれたんじゃ。そして気がつくとなら見たこともねえ場所にいた。そこは広い部屋だつた。そこには窓も電球もないのに昼間みたいに明るいんじゃ。わしの横では他の四人もわしと同じように不思議そうな顔をして辺りを見回していたんじゃ。

わしらは何日もその部屋に閉じこめられていた。そこへ、あの男がやつてきた。男と言つてもあれは人間ではないかもしれないがな。そいつは我々を連れてその建物の中を案内したんじゃ。その中はどこも最初にいた部屋と同じで明るかつた。男はそこで様々な実験をしているということをわしらに説明した。しかし、どうしてわしらがそこに連れて行かれたかについてはなにも言わなかつた。でも、わしらはバカではない。その男が何を企んでいるかはそのうち解つてきた。わしらは建物の中で他の人間たちも見た。人間と言うより、人間だつたものたちといった方が正確じゃな。そこでは人体実験が行われていて、人間を何か別のものに変えようとしているらしかつた。そして、わしらは気付いた。そのうちわしらも実験の材料にされるのだということな。

そうと知つて、わしらは取引をした。その建物の中ではいつも肉を焼くにおいがしていた。わしらにはそれがすぐ牛

肉を焼いている肉だと解った。あの男は焼き肉が好きに違いない。そこで、わしらは牛を男に供給する代わりにわしらを逃がしてくれと頼んだ。しかし、それでは男は納得しなかった。牛に加えて、わしらのうちの一人に簡単な実験をさせるならいい、と言ったんじや。わしらはその要求を承諾して、じゃんけんで誰が実験台になるかを決めることにした。負ける気はしなかったよ。介蔵のヤツは必ず最初にパーを出すんだ。勝負は一発で決まり。介蔵がパーで後は全員チョキ。

男はその場で実験を始めたんじや。天井から妙な機械が出てきて、介蔵の頭に向かって光線を出したんじや。すると驚いたことに、介蔵の脳みその半分が吸い出されちまったのよ。それで、介蔵の頭に別の脳みそを入れたんじや。その脳みその中には最新の技術が入力されているという話じゃった。こんな事をして介蔵が生きていられる訳ねえと思ったんじやが介蔵は何事もなかったようにびんびんしていたんじや。それから、その脳みそもちゃんと機能していたようじや。村に戻ってから介蔵は天才じゃった。介蔵に比べたら他のどんな学者も小学生と一緒にじゃ。あの搾乳機を見たじやろ？ あんなものが作れる人間は改造人間介蔵ぐらいのもんじや。それから、介蔵から抜き出した脳みそを巨大なサル頭の頭に入れたんじや。わしの考えではな、介蔵夫妻や他の二人を殺した森の悪魔って言うのがそいつなんだ。わしらの計画がばれちまったんじや。ヤツらは介蔵に殺されたようなもんだな。皮肉な話だよ。わしらが介蔵の能力を利用して金儲けを企んだばかりに。でもよ、これは欲でしたことじゃねえぜ。わしらはこの寂れた村を何とかしたかっただけなんじや。

おまえさん、署に帰ったら介蔵の脳を調べようとしてるな。じゃがもう遅い。介蔵の遺体はわしがこっそり持ち出して、焼いちまったよ。あの女の捜査官がバラバラにしてくれたおかげで簡単に持ち出せたよ」

「牛ノ尻さん。あなた死にそうなのに良くしゃべりますね」
モルダアが余計なことを言う。

「そうだった。わしはニコラスに撃たれて死にそうなんだった。わしが死ねば証拠は全部なくなる。残念だが、今回の殺人事件は迷宮入りじゃよ。何なら、わしを犯人にしてもいいがね。この事件はわしが招いたようなもんだからな」
そういうと、牛ノ尻巡査は静かに目を閉じた。

「ちよつと、まだ死んじや駄目ですよ。その後のことも詳しく聞きたいんですから」
牛ノ尻巡査は何も言わない。どうやら息を引き取ったようだ。それとほぼ同時に森の奥から閃光が走った。一瞬森が昼間のような明るさになったが、しばらくするとその光は上の方へと上がっていった。光は上空へ行くにつれてどんどん

小さくなり、やがて夜空に吸い込まれるようにして消えていった。

「モルダアさん。今の見ましたか？」

戻ってきたニコラス刑事はかなり動揺しているようだった。

「さあ。あれが、謎の光つてやつかなあ」

モルダアはその光が何であるのか見当がついていたが、言うのはやめにした。

「恐怖の人間サルはどうしました？ ニコラスさん」

「もう少しで捕まえられそうだったんですけど、光とともに消えちゃいました」

「それじゃあ、何にも残らなかったのか。この山のサルを逮捕してもしようがないしなあ」

モルダアが独り言のように言った。

14

高原村を出た車の中でモルダアは黙って窓の外を見つめていた。

「ちよいと、モルダア。いくらペーパードライバーだからって、こんな田舎道ぐらい運転を代わっていただいてもよろしいんじゃないませんか？」

モルダアは黙ったままだ。スケアリーは平手打ちを喰らわそうと思ったが、出来なかった。モルダアは何か真剣に考えているようだった。スケアリーはちよつと面白くない。

「どうして、捜査をやめてしまうんですの？ まだ調べることは沢山ありそうですわよ。あの村にはモルダアを邪魔するようにスケアリーが事件の事について聞いた。

「もう、あの村には何も無いよ。少なくとも僕等が調査することはね」
そういうと、モルダアはまた黙り込んでしまった。

今回の湯けむり殺人事件であたくしは沢山温泉につかっすつかりリラックスさせていただいたわ。信じられないことにモルダアは一度も温泉に入らなかつたのよ。高原署では今回の事件の犯人は牛ノ尻巡査と断定して捜査を打ち切りましたわ。ただし、動機が考えられない上に証拠も不十分ですので、本当のところは解りませんわ。牛ノ尻巡査の着ぐるみには指紋は付いていませんでしたわ。あのフォークから検出された指紋はいまだに誰のものか特定出来ませんの。それから最後まで名前を付けてもらえなかつた、かわいそうな二人の殺害に使われた銃ですけど、あれは警察署から何者かの手によって持ち出された可能性があるそうですのよ。「誰か知らない人が高原署に入ってきたような気がする」ってあのお気楽な警官が言っていたそうよ。高原署の銃器の管理については十分な審査が必要ですわ。

それから、覗きの常習犯、変態モルダアが言っていたいくつかの事についてですけども、これに関してはほとんど証拠が残っていませんのよ。謎の動力で動く搾乳機やトラクターはすべて焼けてしまつて、証拠にはなりませんのよ。ところで、放火した犯人は誰なんでしょうね？ 牛ノ尻巡査かしら？ あり得なくもないですけど、それでは話が面白くありませんわ。きつと国際的犯罪組織の仕業だと思えますのよ。それで、残った証拠というと、未知の生物の毛と未知の素材で出来たグリコのおまけ。毛の方は、証拠としては十分ではありませんのよ。突然変異というものがありませんから、一匹だけ他のサルと少し違うサルがいたとしてもこれは新種の発見とは行きませんのよ。グリコのおまけの方は、専門機関で分析する必要がありますわ。

それにしても、ニコラス様が森に行かれるなんて。きつと変態モルダアと一緒にあたくしのことを覗いていたに違いありませんわ。せつかくいい人を見つけたと思つたのに、がっかりですわ。

F.B.I.ビルディング13階

スキヤナー副長官がスケアリーの報告書を読んで、前に座っているモルダアのほうを見た。

「意外だなあ。キミには覗きの趣味もあつたのかあ」

「違いますよ、ボクは覗きなんかしてませんよ」

「それにしても、キミたちは何をしていたんだ？　ここにある謎のグリコのおまけだけじゃなんにもならないんだよ」

「でも、その物質がなんなのか調べれば、いろいろなことが明らかになると思うんですけど」

「まあ、そのうち調べるとしよう」

「ところで副長官。後ろにいる人は誰ですか？」

スキヤナー副長官の後ろには男が一人座っていて、さつきから何度もウイスキーの瓶を口に運んでいる。昼間だというのに。こんな男を見て誰なのか気にならない人はいない。

「ああ、彼は謎の人物だから気にしなくてもいいよ。キミの活躍次第では重要な存在になってくるかもしれないよ」

「そうなんですか」

モルダアは一応納得したが、気にせずにはいられない、

モルダアが13階の部屋を出た後、謎の人物は謎の物質で作られた謎のグリコのおまけを持って部屋を出ていった。謎の人物は家に帰ると五角形の、正確には五角柱のおもちや箱に謎のグリコのおまけを投げ入れた。

#003 「ドドメキ」

1

F.B.I.ペケファイルの部屋

ここはペケファイルの部屋。今まではモルダアの部屋となっていたがよく考えたらモルダアの部屋と言うよりペケファイルの部屋の方が正確なのでこれからはペケファイルの部屋と呼ぶことにする。そんなことはどうでもいいのだが、モルダアは先ほどから一人この部屋で銃を手にして遊んでいる。きつとアクション映画の主人公にでもなったつもりなのだろう。ホルスターからさつと銃を取り出しては壁に向かって構えてみたり、銃を構えたまま素早く上半身を左右に回してみたり。そんなことを回転椅子に座ったままやっているの、モルダアはさつきから部屋の真ん中でぐるぐる回り続けている。椅子の上でぐるぐるしているのも顔は真剣そのもの。何しろ頭の中でモルダアは今、凶悪犯のアジトへ進入してどこから飛び出してくるか解らない悪者と対決しようとしているのだから。

モルダアの頭の中で繰り返されているアクション映画が最高潮に盛り上がってきたそのとき、部屋の扉がものすごい勢いで開いて、それと同時に「おい、モルダア何やってるんだ！」という声が。妄想と現実がちや混ぜになつていたモルダアは、このことに相当驚いたらしい。キヤア、と悲鳴をあげながら椅子をぐるりと回転させて、振り向きざまに扉の方に向かって発砲した。銃から放たれた㊦㊦弾はパチンという音を立てて今入ってきた人物の太股に当たった。「あつ、ごめんなさい」

まずいことになってしまった。モルダアが扉の方をよく見ると、そこには顔を真っ赤にして怒りにふるえるスケアリーの姿が。「このままじゃものすごく痛い目に遭うぞ。何とかしないと」モルダアはそう思ったが、何とかする前にスケアリーはモルダア目がけて突進してきた。スケアリーはモルダアを椅子ごと突き飛ばして、そのままモルダアに馬乗りになった。

モルダア、絶体絶命！ スケアリーのパンチに備えて顔を横に背けたモルダアの目の前には先ほど放たれた㊦㊦弾が転がっていた。

「おい、きみたち何やってるんだ！」

部屋の入り口でスキヤナーが目を丸くしている。間一髪、モルダアは危機を免れた。

「きみたちはいつからそういう仲間になったんだ？ うへへっ。それにしても昼間から職場でそんなことをされたら困るんだよ。やるんだったら仕事の後、しかるべき場所ではなさい」

スキヤナーは何か勘違いをしているようだ。状況を見れば無理もない。スケアリーは決まりが悪そうに立ち上がった。「違うんですのよ。これは殺人未遂ですよ」

スケアリーはモルダアのモデルガンを持つてスキヤナーに渡した。

「モルダアがこれであたくしを撃ったんですのよ。ですから、あたくしのした事は正当防衛ですわ」

「何言ってるんだよ」モルダアが言い返す。「キミがボクを驚かすからいけないんだ。正当防衛はボクの方だ」

二人の子供のような言い合いをスキヤナーは全く聞いていないようだった。彼はさつきからモルダアのモデルガンを眺めている。

「へえ、最近のモデルガンは良くできてるなあ。でも、何でこんなもの持つてるんだ？」

「だから、ずっと前から銃を持たせてくれて言ってるじゃないですか。ボクが銃を持つてばきつと、もつといろいろな事件が解決するはずですよ」

モルダアは以前、事件と一緒に捜査をしたニコラス刑事にぞつこんなのである。森の中で銃を手していたニコラスをみて、銃を持つてばきつと自分もこんな風に格好良くなれるんだと思っているようだ。それでモデルガンとは何とも悲しい話ではあるのだが。

「驚かされて発砲するようなヤツには、銃は持たせられんなあ。キミ自身の安全のためにも銃はおあずけだ」

スキヤナーはそういうと天井に向けてモデルガンの引き金を引いた。飛び出したBB弾が天井に当たり、壁に当たり机に跳ね返って最後にスケアリーのおでこに命中した。

「あつ、ごめん」

スキヤナーはかなりあわてている。スケアリーはまた顔を真っ赤にして怒っているが、さすがに上司には飛びかかれないうようだ。スケアリーは突然振り返るとモルダアにパンチを浴びせた。不意をつかれたモルダアはそのまま床に倒れ込んだ。顔のすぐ横にはモルダアの撃ったBB弾がまだそこにあつた。そこへもう一発のBB弾がころころ転がってきた。そのBB弾はもう一つと同じ場所に転がってきて、二つが隣り合うところでぴたりと止まった。

「おつ、すごい！」

三人はほぼ同時につぶやいた。

「ところで、副長官。何しに来たんですか？」

「ん？ まあ、別に特に用はなかつただけだなあ。またきみを驚かそうと思つて来てみたら逆に驚かされてしまったよ」

「そんなことだと思ひましたよ。今回の話にあなたは登場しない予定だったんですよ。それに、こんな田田弾騒動も予定にはないんですよ。まったく、作者は何を考えているんですかねえ？」

「それが、あたくしのイメージがお見通し。でも思いついたものは書きたくなくなってしまふんですよ。それより、あたくしのイメージが台無しですわ。あたくしのようなレディーが男の方を殴るなんて。ホントに失礼しちゃうわ。それと、今回の話つて言つてましたけど、あなたは今回の話の内容を知つていらつしやるの、モルダア？」

「そんなはずはない。話の内容を決めるのはこの私である。でもまあいいか。ここはモルダアに説明してもらおう。」

「今回の話はあるバーで始まることになつていたんだ。ボクがある事件のことについてキミを呼び出して、そのバーで待ち合わせるんだ。そこにはぼくら二人ともう一人重要な人物が来ている。その人物はボクに事件から手を引けと警告をするんだ。つまりこれはかなりオリジナルに近い話の内容だね」

「オリジナルつてなんのことですか？」

「ペケじゃなくてエックスの方だよ。でもこのペケファイルはもうすでにパロディーの域を通り越して、ストーリーは一人歩き始めてしまつていゝるよね。今更オリジナルに近づけても意味がないんじゃないか、ということでは予定を変えたのかも知れないなあ」

「あり得なくもない話だなあ」スキヤナーが口を挟んだ。「ある情報によると我々の名前を変えようと言う案もあるらしいんだ」

ええ、そうなの？ それは知りませんでした。でも確かにやりづらいですよねえ。時々、私は書いているときに「モルダア」とか「スカリー」とかオリジナルの方の名前を書いてしまふんです。でもしばらくはこのままで行きますよ。

「副長官。それはどこから手に入れた情報ですか？」

「それは国家機密だから君たちにも言えないよ」

「そういう情報を密かに教えてくれる方が今回登場するはずの方だったんじゃないやありませんの？ あたくしの推理ではその人は怒百目鬼鐵円（ドドメキテツマル）という名前に違いありませんわ。あの登場人物の紹介に名前が出ていらした」

「そうかあ。それにしても、今回の話はどうなるんだろう？」

「どうでしょうかねえ？」

「とりあえず、あたくしはそのバーに行つてあなたを待つてみることにしますわ。それじゃあお先に失礼いたしますわ」
スケアリーはさつきと部屋を出ていつてしまった。残された二人はしばらく考えて込んでいたが、二人の目と目が合うと、同時に口を開いた。

「バーつてどこのことだろうか？」

3

路上

モルダアはスケアリーの後を追つて「FB」ビルディング前の道路まで来たが、もうすでにスケアリーの姿はなかった。スケアリーはいつたどこへ行つたのだろうか。モルダアが考え込んでいると、何かが彼の頭の上に当たつて路上に落ちた。見るとモルダアの前で「BB」弾が二三回バウンドしてそれから排水溝に落ちていった。モルダアが「FB」ビルディングの方を振り返つて見上げると、13階からスキヤナーが顔を出してモルダアに向かって手を振っている。よく見るとその手にはモルダアのモデルガンが握られていた。スキヤナーはモデルガンで彼を撃つたらしい。

「おいモルダア！ 忘れ物だぞ」

そういうと、スキヤナーはモデルガンを放り投げた。13階から。スキヤナーの手を放れたモデルガンは加速度をつけ

てすごい速さでモルダアに迫ってくる。モルダアはおきまりの悲鳴を上げるまもなく両手で頭を押さえて迫りくるモデルガンから身を守ろうとした。幸いモデルガンは彼の30センチほど手前に落下した。もちろん粉々である。あたりに散らばったモデルガンの残骸とモデルガンに装填されていたBB弾をモルダアは悲しそうに見つめている。買ったばかりなのに……。モルダアの足下はBB弾だらけ。

「この事件からは手を引くんだ」
モルダアの背後から彼に声をかけるものがある。

「なんですか。あなた、まだ出てくる場面じゃありませんよ」

「世の中には知ってはならない真実も……。キミどうしたんだその顔、誰かに殴られたのか？」

モルダアの顔にはスケアリーに殴られたときの青アザが出来ていた。モルダアは女に殴られたなんて解ったら、優秀な捜査官としての名譽に関わると思ったので何も言わなかった。

「そんなことより、あなたドドメキさんでしょ。ボクがこれからスケアリーとバーで落ち合ってから出てきてくださいよ」

「そんなこと言われても、私の出番がなかなかこないから自分で出てきたんだよ。まあ、これからも私の気分次第で情報を提供するから、そのつもりで」

「それは最後のせりふですよ。ボクはこれからバーに行きますから、そのときまで待っててくださいよ」

モルダアはそう言ってその場を離れようとしたが、もしかして、いまドドメキさんに色々聞いたら、JFOのこととかDPMスタファのこととか教えてくれるんじゃないかとも思った。何しろこのドドメキさんは話しに加わりたくて仕方がないみたいだから。モルダアは振り返ってドドメキさんの姿を探したが、彼はモルダアが目を離していた隙に姿をくらましていた。

やっぱり謎の人物みたいだ。

モルダアはそこら中のバーを探して回ったがスケアリーは見つからなかった。もうそろそろペケファイルの部屋に戻ろうかと思っていると、彼の携帯電話が鳴った。スケアリーからのようである。電話を持つてなら最初からかければいいのに。

「ちよいとモルダア！ いつまであたくしを待たせるつもりなんですの？」

「待つてくれよ。キミがどこに行くか言わなかったからボクは町中のバーを探して歩いてたんだよ」

「あたくしがバーなんて薄汚いところ行くわけないじゃありませんか。あたくしはオープンテラスのカップフェですつと待つていましたのよ」

「オープンテラス？ ああ、解つた、スタバでしょ」

「ちよいと冗談はよしてくださらない？ あんな所はファミレスと変わりませんわ。恥ずかしくて入れませんわ」

「まあ、どこにいてもいいんだけど。もう待つてる必要はないみたいだよ。さっきドドメキさんが出て来ちゃつてさあ、色々話していったんだ」

「あらいやだ。そうですよ。失礼しちゃいますわ、もう。それじゃあ、あたくしはカフェラッテを飲み終わつたらもう帰りますからそのおつもりで」

「あれもう帰つちやうの？ とところで……」

モルダアの話聞かずにスケアリーは電話を切つてしまった。

「なんだ。それじゃあボクも帰るかな」

F.B.I.ビルディング

F.B.I.ビルディングの地下の廊下を息を殺して歩いてくる人影がある。その人影はペケファイルの部屋の前まで来る

と、少し中の様子をうかがって、それからものすごい勢いで部屋の扉を開けた。

「おいモルダア！ 何やってるんだ！」

誰もいない部屋にスキヤナーの音が虚しく響きわたる。

「あれ、みんないないのか……。なんだか今日は調子が悪いな。それじゃあ私も帰るかな」

今日は調子が悪いスキヤナー。帰り際にビルの前に散乱しているBB弾を踏んで転んだことは言うまでもない。

6

モルダアのアパート

モルダアが自分の部屋に入ると中にスケアリーがいた。

「あれ、どうしてキミがここにいるんだ？」

スケアリーは何も言わずにモルダアを見つめている。見つめていると言うよりは睨みつけている。モルダアは自分がまた何かやらかしたのだと思い、謝ろうとしたがいったい何を謝ればいいんだ？

「あの、何を怒ってるのか解らないけど、何か悪いことをしたなら謝るよ、この通り」

とりあえず謝ってみたが、なんの効果もない。そのままモルダアを睨みつけていたスケアリーはふわりと浮かび上がった。何で？ と言われても知らない。

浮かび上がったスケアリーは床と水平になるとモルダア目がけてものすごい勢いで飛んできた。

「嘘！ あり得ない！」

ここでモルダアは目を覚ました。

「なんだ夢だったのか」

そう、夢だったのです。納得いかなくても、収集がつかなくなったら夢にしてしまえばいいのです。

「それにしても変な夢だったなあ」

モルダアは机の上を確認した。そこにはさつき買ってきたばかりのモデルガンが置いてある。「やっぱり夢だった」モルダアは大事なモデルガンが無事だと解つて一安心。でもモルダアは彼の顔に大きな青アザが出来ているのにはまだ気付いていない。

#003 「システムキ」 Little Mustapha